

289
N934

289-N934-4ウ
1200500732235

大 乃 木

櫻井忠温 著



始



108

木乃大

289
N934
4

著 溫 忠 井 櫻





將大木乃の上馬



954
241



那須野(農生活時代)の家



聯隊長の乃木大将



那須野の家の臺所

「大乃木」を送るについて

乃木大将逝いて三十年である。六十四歳であつたから、生きてゐられるすると九十四歳になるわけだ。——まことに早いものである。

時代の流行子は、五年か十年も経てば忘れられてしまふものだが、さすがに大将は、年と共に、慕はれ、敬はれ、その徳に副はんことを期してゐる。

大将は、大将自身のものであり、われ／＼が大将の腹を無遠慮に付度することは謹むべきものだと思ふ。

それを、いろ／＼な尾ヒレをつけて、大将を人間以上のものに取扱ふといふやり方は、大将自身も迷惑に違ひない。

その人間らしさ、まる裸なところがいゝのだと思ふ。

X

X

大將ほど、われ／＼の胸に情熱と、勇氣を吹き込んだ人は少ないと思ふ。

人間生きて、生き甲斐ある生活を送つた人といへば、大將をその隨一に推さねばなるまい。

大將自身は、半生を暗い氣分で過したかも知れなかつた。しかし、大將の魂は、永久に日本人の魂に生きてゐるのだ。

この大戦に會ふて、皇軍將兵がかくの如く忠誠であり、かくの如く勇敢であるのも、畢竟乃木魂の然らしむるところである。

將軍は死して死せず、尙ほ地上に在るの感が深い。

X

X

「尉繚子」に「將たるもの、暑に蓋を張らず、寒に衣を重ねず、險には必ず下りて歩く、軍井成りて而して後飲む。勞佚必ず身を以て之を同くす」とあるが、大將は正にその人であつた。

部下が、大將のために死なんことを思はざるものがなかつたのも、全く大將その人の風格が然らしめたものであると思ふ。

こゝに大將傳を草したのも、何人もが大將の如くであれば、戦線はもとより、銃後の人も己れを空うして當ることが出来ると思うからである。

慾望も、虚偽もない世界が戰場である。この心を忘れては銃後は紊れる。

眞に重大事の際會してゐると思ふ。敵はどこまでも戦ふであらう。十年や二十年を以て、この戦争が終らうとは思へない。五十年或は百年の戦ひに堪へ得るだけの用意がなかつたら、今日までの戦果もどうなるかわからない。

どこまでも我慢一點張の大將に學ばなければならない、と、しみ／＼思ふ。

X

X

昔と今と戦争のやり方も違ひ、兵器も異なつてゐるが、しかし、あの旅順の難戦は、實によい教訓をのこしたものだと思ふ。五萬の犠牲も死して瞑すべきである。

香港に、シンガポールに、皇軍は乃木式戦法の音を忘れなかつた。

乃木式肉弾あつてこそ、どの戦場にも華々しい戦果が揚がつてゐるのである。

旅順戦は、大將に取つて悲痛な思出であつたあらうが、しかし、その戦争が、香港にもシンガポールに、コレヒドルに生きてゐたのである。

乃木傳を編する所以も「生きてゐる大將」を、描くつもりなので、過去の大将といふつもりは露なないのである。

昭和十七年九月十三日、乃木大將三十年記念日、野州西那須野石林なる乃木神社を参拜して。

著者

四

この書を稿するに方つて

乃木大將についての記録は山ほどある。凡そ人の傳記として、かくの如くハンランしてゐるものはないであらう。

それだけ、乃木大將に求むるものが多いからでもある。

中にも随分如何はしいものもあれば、「乃木大將傳の筆者は、己れ第一人者でござる」といつた獨善的の人もないではない。

X

X

私も曾ては「將軍乃木」を録した一人ではあるが、甚だ物足らないものであつた。隨筆風のものであり、一向にお役にも立たなかつかも知れない。

その私が又こゝに「大乃木」を草したのは、前著に不満の點が多く、もつと大將を紙上に浮かせてみたいと思ふ希望からして生れたのである。

五

隨筆として書いたといふ點からいへば、前著とは變りないものであるが、これによつて「傳記」以外に、大將その人の姿、その人の思索、その人の情熱、一から十まで人間的な動きが、この一篇から湧き上がつて来るならば、私のこの著の目的は達せられたのである。

むろん、「ある人間の記録」といへば傳記には違ひない。この著を傳記として見てもいいであらうが、しかし、それだけでは足りないものがあり、私もそのつもりではないのである。

大將の手の上げ方、足の動き方に至るまで織り込んで、大將その人を再現しやうとしたところに、私のこの著の意味が存するのである。

この著の中に、もし何等か参考になるものがあれば、ドシ／＼取つて利用して貰ひたいと思ふ。現に前著の中からも相當人々の著述中に採られてあり、上演されたこともあるのである。所謂「專賣物」ではないから、いくらでも抜き取つて貰ひたい。

大將にはいろ／＼と世話になつたので、私は自分の見たこと、感じたことを十分に書いたつもりである。この書なくして、あらゆる傳記も意味を爲さないものでないかとさへ思ふのである。その書をそれほど立派なものといふのではない。私を中心としてのいろ／＼な物語がかなり多分に盛つてあるからである。

目次

一 大將とわたくし……………	三
二 縦隊の前に……………	八
三 壯烈の二字……………	二七
四 玉の御聲……………	二二
五 門をたたく者……………	二五
六 蘆花と書生……………	二九
七 魂の傳統……………	三元
八 少年と少年……………	四四
九 あの日、あの時……………	四七
一〇 悲風田原坂……………	五〇

一一	軍旗の所在は	四
一二	兒玉と乃木	五
一三	旅順陥落半日	六
一四	乃木一人のもの	七
一五	獨立を以て懼れず	八
一六	この思ひ	九
一七	その風姿	一〇
一八	焚火して	一一
一九	乃木式	一二
二〇	陣にある思ひ	一三
二一	南に使用して	一四
二二	一老塞生	一五
二三	威と恩と	一六
二四	新を趁ふて	一七

二五	愛のたづな	一八
二六	繪巻物の人	一九
二七	文人乃木	二〇
二八	那須野の原	二一
二九	草に寝て	二二
三〇	上陸第一日	二三
三一	父子兄弟共に旅順	二四
三二	柳樹房の夜	二五
三三	この父、この子	二六
三四	夢の如く悲し	二七
三五	多情無情	二八
三六	「乃木苦」の花	二九
三七	血涙の書	三〇
三八	死以上のもの	三一

- 三九 鶉.....一八九
- 四〇 忠は一つのみ.....一九二
- 四一 風の如く往く.....一九五
- 四二 泣きぬれて.....一九八
- 四三 生きて地上に.....二〇一

乃木大將略譜.....二〇五

乃木將軍と旅順戦.....二二一

- 一 旅順への口.....二三三
- 二 砲乎人乎.....二三六
- 三 虎の如く龍の如し.....二三八
- 四 砲臺の頭.....二三〇
- 五 仰ぐ大將.....二三四

- 六 山谷皆死屍.....二三六
- 七 大將丘に立つ.....二四〇
- 八 泣く／＼戦ふ.....二四二
- 九 「大魔砲」.....二四七
- 一〇 大將涙して.....二四七
- 一一 死の挽歌.....二五二
- 一二 茫々四十年.....二五四

大
乃
木

一 大將とわたくし

始めて乃木大將を見たのは、私が士官候補生として、松山聯隊（そのとき歩兵第二十二聯隊）にゐたときであつた。

乃木大將は、われ／＼の師團長で、第十一師團長（普通寺）であつた。

入營してから五ヶ月の日が経つたある日のことであつた。夜中、不意に喇叭が鳴り響いた。

喇叭といふものほど、兵隊に取つて異常な刺戟を與へるものはない。朝、起きるのも喇叭、夜寝るのも、飯を食ふのも喇叭ではあるが、その喇叭が、何ともいへない異常な響きを持つてゐるものである。喇叭即ち「命令」だからでもあらう。

まして、人の寝靜まつた頃に、テッターッといふひときこそ、これほど大きなショックはない。

昔、佐賀の亂に、賊徒が聯隊を襲撃したとき、喇叭が營内に鳴り響いた。が、そのときはもう營内は血の河となり、種田少將は刺し殺されてゐた。

不時の喇叭に飛び立つや否や、直ちに武装を整へ、何時でも敵に應ずる準備が出来ておなければならぬといふので、よくこの稽古をしたものである。

「大久保彦左衛門は、太鼓がドン、ドン、ドンと三つ鳴る間に、チャンと鎧に身を固め、鎗をしごいで飛び出したものだ」

といふのが、係り士官の口癖であつた。

その喇叭が鳴りひびいたのである。

私たちは、毛布をはねるなり、バネ仕掛のやうに飛び立った。手につかむものは、先づツボンだ、上衣だ。だが、どちらが、上だか、下だかわからぬ。滅茶々々である。

何しろ、入營後まだ百日あまりしか経つてゐない。あわてるのも無理はない。三分や、五分で出来る仕事ではない。背囊に入組品、手拭、絲巻、雑品など一切を入れ、外套、天幕、飯盒をしぼりつけ、雑囊、水筒、脚絆を身につけ、靴を穿き、帽子を冠り、銃をつかんで飛び出すまで、なか／＼容易なことではない。のぼせ上がつてゐるので、どちらを先に着けていゝか見當がつかない。背囊を負ふてみれば、水筒雑囊を忘れてゐたり、イヤハヤ、お話にならぬうろたへ方。

脚絆も、右と左を取り違へたり（そのころは白い麻の脚絆で、ボタン掛である）そのボタンが、な

か／＼かゝらない。

ウロウロしてゐる内に、早や隣の者が出て行きさうにする。

私が、キョロ／＼して外套を巻いてゐるときであつた。——その外套たるや毒蛇が豚でも呑んだやうな恰好だ。——ガタガタ／＼とさわがしい音がして、部屋へ入つて来た人があつた。提灯をさげた人が先頭に立つてゐた。

そんなことに氣を取られてゐる場合でないのだが、どうも靴の音が三人や、五人ではなささうなので、ヒョイト顔を上げて見ると、提灯のうしろに、白ツボンの人が立つてゐた。

すぐに乃木師團長だといふことがわかつた。私の狼狽ぶりはいよいよ極に達した。手や足が、ガタガタと震へ出した。

F候補生は、輜重兵の出身だけに、素早く仕度を終つて、外へ出て行つた。

Iは幼年學校出だけに、これもFのあとへつゞいて行つた。

餘の五人もとも角ガタゴタと出て行つたが、又引かへして来るのもあつた。何か忘れたと見えて、残つてゐるのは、私とY候補生だけである。Yは「牛」といふ綽名があるだけにノロイ。その相棒が私と来てゐる。

「候補生、何を愚圖々々しとる」

かういつたのは乃木師團長であつた。

「バツ」とも何ともいへない。いへる時の場合でもない。

愚圖々々してゐるつもりではないのだが、だれよりも早くやらうと思つてゐるのだが、手がそこま
で動かない。

そこへ「何を愚圖々々しとるか」といはれたのだから、全く骨も肉もバラ／＼になるの思ひだ。

師團長は、暫く立つて私とYのうるたへ振りを眺めてゐたが、その内、外の部屋の方へ移つて行つ
た。

ヤツと仕度相整へて外へ出ると、もう大方集まつてゐた、あとから走り込むのか恥しいくらゐであ
つた。

「オイ、候補生、辨當を取りに來い」といつた者があつた。

私たちは又舎内へ入つて行つた。見ると、朝めしもチャンと並べてあつた。辨當、朝めし——こり
やけふはたゞ事でないわいと思つた。

私たちが箸を取らうとすると、河野班長（今、福岡動物園の名園長である）が來て、「候補生何を

愚圖々々しとるか。今ごろ飯を食つとるといふことがあるカッ」と、怒鳴つた。

私たちは、ビックリして飛び出したが、大事な辨當まで忘れてしまつた。

師團長も、班長も同じやうに「何を愚圖々々しとるか」といつた。全く恥しい次第である。

その日は、十五里からの行軍があつた。夜なかの三時に起されてから十五里は相當こたへる。しか
も休憩も何も抜きだからひどい。班長に叱られたお蔭で腹に米粒一つ入つてゐない。

歩き歩き何度かブツ倒れさうになつた。晝飯になつても辨當がない。水では凌げない。

ところ／＼、橋の袂や、川のへりや、町外れに立つて、赤帽、白ズボンの人が栗毛の馬に跨つて、

われわれの行軍振りを見てゐる。乃木師團長だ。

如何にへト／＼になつてゐる私たちも、師團長の姿を見ると、背中に金棒を入れたやうにピンと
びるからえらいものである。

私は、ある大川をサフサフと渡つてゐる最中ブツ倒れさうになり、そばのものに助けられて、ヤツ
と岸へ這ひ上がったが、そこに乃木さんが立つてゐたので、ピンとなり、又行軍をつゞけた。

そんなことも、もう古い古い昔となつた。そのとき、聯隊の候補生は九人ゐたのだが、日露戦争に
は、乃木大將の麾下として、旅順に戦ひ、大方は戦死してしまつた。少尉としては古參格であり、ど

こへ使つても使ひ頭だつたから、随分よく死んだ。

少尉になつたのは、明治三十五年の夏であつた。

「半」のYは、少尉になると、北海道の聯隊へ轉任したが、それがやはり旅順に出た。上陸後一週間とたゝぬ間に戦死した。

乃木師團長の赤筋入りの箱みたいな帽子、肋骨服、白ゾボンの姿は、私たち候補生の目に、焼きつくやうに映つたものだつた。

その乃木大將のもとで、旅順に戦ふことになつたとき、「よし、やるぞ、」と思つた。大きなものが頭の上に光つてゐるやうな気がした。

二 縦隊の前に

その後も師團長は、たびたび聯隊へ見えた。來られるとキツトわれわれの前に立つて、いろいろなことを訊ねられた。

その風が如何にも人なつくと思つた。胃し難いものがある中にどこかにやさしい瞳が動いてゐた。その質問も随分飛び離れたものが多かつた。一寸人の氣のつかないところ、痛いところを刺すといつた風があつた。「皮肉」とも取れやうが、さういふ風でなかつた。「こんなことでも知つて居れ」といふよりは、「何事にも注意深くあれ」といふ訓へのやうに思へた。

酒保へ行つて、係りの軍曹に、——「この餅は何処あるかの」などとたづねられたりした。

これには、答へることが出来る。一個何処といふ約束で、商人から取り寄せてある餅である。一個何十匁といふことは直ちに答へることが出来る。

これだけなら何の變哲もないのだが、これで終つたと思ふと、さうではない。

「さうか、すると餅は何処あるかの」

「——」

如何な係りの軍曹でも、これには答へられない。餅まで計つて買つたワケではないのだから。

笑ふにも笑はれない時の風景であつた。

餅の量目まで問ふといふのは變つてゐるが、こんなことはいくらもあつたことである。

随分人の意表に出るやうなことがあつたが、大將が言はれるだけに憎めなかつた。その風采からし

て、一寸髯のモヤ／＼したアゴを前へ出し、目を細くし、背を前曲みしてゐる風態は、如何にも「隣りのおぢさん」といつたやうな感じがした。

「候補生、シャツのボタンはいくらついとるかの？」

いつか、かういふ問ひをかけられたことがある。

シャツのボタンの数くらゐ何でもないといへない。毎日着てゐるシャツだが、さてボタンがいくつであるか、三つか四つかといふと、一寸思ひ出せない。服（軍服である）のボタンなら五つと極つてゐるが、同じ極つてゐるシャツのボタンが、いくつかといふことはハッキリいへないものだ。

「ハッ」といふだけである。甲、乙、丙とたづねて廻るが、三つといひ、四つといひ答へるものも確信があつてゐない。中には六つなどいふものもあつた。そんなについてはゐない。

そばに、聯隊長がニコニコして立つてゐるが、聯隊長だつて答へられないかも知れない。

毎日々々、自分の手でかけてゐながら、さて、たづねられてみるとわからない。

ボタンが三つあらうと、四つだらうと差支ないやうなもの、さういつた急所を突くところに又一つの「乃木式」があつたといへやう。

假頭の髷のかけ目をたづねたり、シャツのボタンの数を訊いたり、一寸風が變つてゐるだけに「乃

木さんは面白い人だ」といつたやうな親しみが持てるやうになつた。

「親しみ」といふについてはワケがある。今とは違ひ、その頃は上下の間は、天と地とのへだたりがあるやうに思つてゐた。——決してそんなことはないのだが、中隊長でさへ一寸そばへ寄りつけないやうな感じがしてゐた。まして師團長となると、全く「恐ろしい」ものか何かのやうに思つてゐた。

「親しみ」だの何だのといふことを考へるだけでも、不届なことであつたかも知れない。それくらゐであつた。

尤も、その頃の中隊長や大隊長といふと、今日のやうに若くはない。「桃栗三年、柿八年、××大尉は十三年」といつたくらゐ進級が遅かつた。だから、大尉、少佐となると、恐ろしく老成振つてゐたものだ。髯の流行る頃だつたから、中には纏のやうな髯を生やしてゐる人もあり、鐘馗さんみたやうなスゴイ髯のもゐた。

われ／＼候補生は、毎日集會所で、將校と會食をすることになつてゐた。

これが一苦勞であつた。めしが喉に通らない。茶もロクロクのめない。——のではない、のむやうな度胸が出ないのだ。

このころの若い者は、人前でチ／＼と揚子を使つたり、大きな口をあけて茶を飲んだりするが、

昔はそんな不作法なものではなかつた。

大隊長や、聯隊長の前へ坐らせやうものなら、全く喉へ石をつめたやうになり、からだも棒を呑んだやうにシヤチコ張つてしまつた。

といつて、聯隊長たちが威張つてゐるワケではない。よく話を向けられるのだが、その受答へがなかく出来ない。思ふと、生眞面目なものだつた。

休日には、中隊長や大隊長の自宅を訪問することになつてゐた。いろいろと、経験話や、訓話などを聴かして貰ふのだが、一時間か二時間でも、畳の上に膝を折つたまゝでゐるので、話などは耳に入らない。苦しいの苦しくないの、いざ歸らうとなると、足が痺れて立てなくなり、襖につかまつて匍ひ出たことさへある。

之れが鍛錬でもあつた。さういふ風に育てられてゐたのである。

強い兵隊を造らうと思へば、それだけ強い仕つけが要つた。その時代はなかなかかましかつた。

ところが、乃木師團長のビール事件なるものが起つた。「事件」といふには當らないが、「事件」とさへ考へられるやうな突拍子もないことが起つたのである。ビールがモトであつたから、假りにビール事件といつてゐるのである。

ある日のこと、乃木師團長が聯隊へ見え、夕方集會所で御馳走があつた。私たち候補生も列席を許された。

師團長は、何か面白さうに話しながら、しきりにビールの満を引かれた。今日なつてみると、乃木大將は何となく陰鬱なやうに考へられないでもないのだが、昔見た大將は、だれより一倍話し、一倍楽しさうに見えた。

ビールをガブガブ飲むところなど。随分酒のいける方だと思つた。その日は寒い日で、南國ながらヒュー／＼と冷たい風が窓をたゞいた。

「一つ暖めて來んかい」

といふ聲が師團長の口から漏れた。

何を暖めるのかと思つたらビールのお燗をするのである。

何しろ冷たいビールと、熱いビールとで、腹の中は滅茶々々になつたらう。

しばらくすると大將は、ビールのコップを高く上げながら、大きな聲で、「中少尉、一列側面に集まれ！」と號令をかけられた。

驚いたの、驚かぬので、第一、師團長の號令なんか聞いたことがない。酔が廻つてゐるとはいへ、

師團長の號令を聞いた中少尉連中の喜びやう。

中少尉連中は、號令に従つてめいめいビールのコップを持つて、忽ち一列縦隊に列を作つた。私等もその最後尾に並んだ。

一體何が始まるのだらう、と思つた。大隊長、聯隊長などは目を圓くしてゐた。

「前へ進め！」

いよ／＼始まるのだ。大將は、自身先頭に立つて、板間を踏み鳴らしながら歩き出された。あとのものも調子を合せながらつづいた。

大將の口から、大きな聲で軍歌が飛び出した。

「四百餘州をこぞる、十萬餘騎の敵、——」

一同は、それに和して嘯鳴り出した。

「四百餘州をこぞる、十萬餘騎の敵、——」

「國難こゝに見る、弘安四年夏の頃、——」

「國難こゝに見る、弘安四年夏の頃、——」

士官たちは、馬のやうな足どりをしながら、歌ひ且踊り歩いた。割れるやうな騒ぎだ。

當番兵や、小使や、炊事のおやぢまでが、部屋の入口につめかけて来て、ビククリしてゐる。

板間も抜けさうに、硝子窓も毀れさうに。

膠か何かで固つたからだだが、一時に溶けたやうにのびのびした氣持になつた。

大將は、ビールを一のみにしては、又ついでもらひ、そして、軍歌をどこまでも／＼謳ひつづけられた。

ときどき「もつと活潑に！」などといはれた。士官たちは、もう活潑の餘地がないくらゐに騒ぐ。

聯隊長たちも、之を見てはジツとしてゐられなくなり、列の中へ割り込んで活潑に謳ひ、且つ活潑に飲みながら歩いた。

やがて、大將は部屋から出て、庭の方へ歩き出された。そして、泉水の廻りをグルグルと廻り出された。

少し年を取ると、隠居然と構へたがるものであり、傲然としてゐることが威嚴を保つ所以だと考へてゐる人もあるものだが、身師團長でありながら、若い中少尉連中と嬉々として楽しむといふことがうれしい。大將はこんな人であつたのかと、だれしも意外でもあつたが、いひやうのない親しみが持てた。日露戦争が起き、われわれの軍司令官が乃木大將であるといふことを聞いたときは、どんなに

うれしかつたかわからなかつた。

ビールの列はグルグルと泉水のまわりを取巻いた。一番尻ッポにゐた私と、先頭の大將とが食ツつきさうになつた。

「こいつあいかん」と思つたので、チョコ／＼と前へ行かうとすると、大將は、私の腕をしつかりと抱へて、――

「候補生しつかりやれ！」

と、いはれた。私は何だか氣がポーとしてしまつた。

「候補生、しつかりやれ！」

この言葉が、どれほど私を引立てたか。後の日、旅順で戦つたとき、私はいつも昔、將軍の手に抱かれたやうに、將軍のもとで死なんことを思はざる日はなかつた。

どんな苦しい戦さの中でも「候補生、しつかりやれ」の言葉を思ひ起しては、氣を振ひ立てた。

大將の言はれたことが、どういふ意味であつたにしても、――たゞ、その場だけのことであつたにしても、片時もこの一言を忘れずに、今日まで過し得たことを有難いと思つてゐる。

こんな愉快な大將であつたことを、知る人は、或は少ないのではなからうか。人間的にほんとうに

裕かな人であつた。

三 壯烈の二字

大將の應接間は、かなり廣く、兵隊屋敷のやうな粗末な板張りで、馬の皮が一杯敷いてある。何か因縁のある皮なのだらう。

丸テーブルが一脚置いてある。大將が自刃の前日に寫した寫真にあるのがそれである。

腰の抜けたやうな長椅子と、小さな椅子がころがつてゐる。――轉がつてゐるといつた感じで、キチンとしてはない。長椅子なんか斜めに部屋のマン中ごろにのさばつてゐた。

テーブルの上に置いてある灰皿は、どう見ても縁日ものとしか見えない瀬戸の安物である。

長椅子のそばに、紙屑籠のやうな状差しがある。いつ見ても手紙がいつばいつまつてゐた。額などはなかつたやうだ。

部屋の壁にストーブが取りつけてある。

ある冬の朝であつた。(七時ごろだつた)行くと、「オー、来たか、入つてくれ」といはれたと思ふと顔をひつ込めてしまはれた。

私はツカ／＼と入つて例の廣い部屋へ入ると、大將は左脇に焚付をかゝへて入つて來られた。そして、ストーブに入れてマッチをすり、ブーブーとけむの中を吹かされた。

「私がやります」といつても、「ナニ、いゝ。大丈夫だよ」といつてブーブーと、しばらくやつて居られた。

その内に火が燃え上がった。

軍服の大將が焚付をかゝへて出て來られた姿、口を尖らしてブーブーと火を吹いてゐられた姿は、今も目の前にハッキリと繪のやうに映つてゐる。

狭い廊下を隔て、小さな部屋がある。私が、「肉弾」の題字を頼んだときだつた。「こちらへ」といつて大將が先に立つて、その部屋へ入つて行かれた。

大きな六尺机が、部屋の片隅に置いてあり、その上に、絹とも紙ともわからぬが、巻いたものが高く積み上げてある。

恐らく「揮毫を」と諸方から送りつけて來たものだらう。

少し人の名聲を聞くと、よく無暗に揮毫を依頼してくるものである。千に一つも成功すればいゝといふので、四方八方へ手紙や絹を送りつける病人もある。

大將のところへは、かうした病人が押しかけて來たに相違ない。大將が一々それを書かれはしなかつたであらう、ことが想像される。

「肉弾」の題字を頼みに行くと、大將は「フム、さうか、書かう」といはれるなり、立つて私をその部屋へ連れて行かれた。

大將は、テーブルの上から、無雜作に絹地を引出して、別のテーブルの上にひろげられた。

書いて貰はうといふ私が、手ブラで行くなんか、よろしくないのだが、何だか押つけがましくなるかと思ひ、書いて下さるなら、改めて出直すつもりであつた。それが「ウム、書かう」といつて、すぐさまそこへ連れて行かれたのだから面喰つた。

この部屋には、磨りためた墨汁が、大きな硯の池にあふれるやうになつてゐた。

大將は、大きな筆を取るなり、墨汁をタップリふくませながら、何か口をモグ／＼させてゐられたが、

「何と書かうかの」

と、私の方へ顔を向けられた。

「何でも結構でございます」

「ウム」

墨汁が穂先から垂れさうになる。

アッと思ふ間に、スラスラと「壯」の字を書かれた。つゞいて「烈」の字が書かれた。烈の字のり
が、すこしかすれたので、チョコ／＼と提灯屋をやられた。

「これがよからう」

「ハイ、結構でございます」

筆を置かれるなり、別の筆で、「贈櫻井中尉、希典」と書かれた。

「よからう」と力づよくいはれて、一歩うしろへひかれた。

大將は、一息して筆を置くと、絹の兩はしをもつて、火鉢の上にかざされた。墨が垂れるやうにつ
いてゐるのを、丹念に火にあぶられた。

乾くと、こんどは紙撚りをつくられた。そして絹を巻いて、その上を紙撚りで結ばれた。

字は、一字が一尺大もあるもので、大將の遺墨中でも餘程大文字のものである。

その部屋と、そのときの大將の書き振り、火鉢、紙撚りのことなど、思ひ出はつきない。

壯烈！ 大將の一生は、たゞ「壯烈」の二字に盡きてゐる。旅順戦もまた「壯烈」なら、大將の死
も「壯烈」そのものであつた。

四 玉の御聲

私が「肉弾」を書いたことを話すと、非常に喜ばれた。

「將兵の勇戦ぶりを紹介され、陣歿者の靈も喜ぶことだらう」といはれた。

その第一版が出来ると、それを持つて北陸の旅へ立たれた。

汽車で、それを讀み盡されたさうで、ところ／＼に鉛筆で記入されたりした。そして、松本に泊ら
れた時であつた。そのさる人に「これを讀んでみい」といつて贈られた。

その書物が、私の手許にあるなら、どんなにかよい記念だと思ふが、その受けた人がだれであるか

知らない。

歸京後、私を呼ばれ、内容について、いろいろと注意があつた。地名が違つてゐるとか、あの時はかうだつたとか、何分、一少尉として狭い範圍しか知らない私のこと故、間違ひも多分にあつたことと思ふ。第二版から大將の言はれるまゝに訂正して出した。

「肉弾」は、大將がいろいろな方面へ送られたことも知つた。

「肉弾」が出来ると大將は、私に岡澤大將に會ひに行け、といはれた。岡澤大將は當時侍従武官長であつた。

私は、侍従武官長を訪ねるわけが解せなかつた。どういふことか知ら、と思つてゐた。

言はるるまゝに、岡澤大將を訪ねると「肉弾」について、乃木大將からいろ／＼と話を聞いたが、お上へ申上げて置くといふことで、全く意外のことであつた。

四五日して、官内省からお召状が来た。

明治三十九年六月二十五日は、私に取つて何といふ感激深い日であつたらう。その日の午前十時三十分、正装して参内した。

十一時二十分、侍従武官長に手を取られて、——そのころ歩行も困難だったので、——陛下の御前

へ進んだ。そこは、御座所であつた。

そのとき 陛下には「歩行は大丈夫か」との御下問があつた。

陛下の御聲を拜したのは始めてであつたし、私に御聲がかかるものと思つてゐなかつた。

御聲は朗々と、御部屋一つばいに擴がつた。御座所は、畏れながら疊が十疊くらゐで、大きな御机が据えられてあつた。その前に 陛下には御起立のまゝゐらせられた。

私は 陛下の御下問に御答へが出来なかつた。舌は鉛のやうに重かつた。たゞ、首を垂れてモグモグしてゐた。すると、侍従武官長は、——

「大體差支ございませぬが、御前でしくじりがあつては思ひまして、手を引いて、参りました」と申上げた。

陛下に、軽く「フム、フム」と仰られた。そして、つゞいて、——

「酒を飲むか」

と仰せられた。意外なおたづねであつた。が、私は幾分落つきを得たので、——

「酒は飲みませぬ」

と、申上げた。陛下は高らかな御聲で、——

「ハア、酒を飲まぬので、たくさん血が出ても助かつたのだな」と、仰せられた。

そのほか、負傷の所のこと、そのときの模様など御たづねに預つた。

一中尉として、何たる光榮、何たる感激であつたらう。「肉弾」の第一版を出したのは、明治三十九年四月二十五日であつたから、拜謁は、丁度二ヶ月後の同じ二十五日であつた。

著書の上から、拜謁を賜はつたのは、前にも後にも私一人ださうで、まして微小の一士官である。かゝる榮譽を荷つたのも、全く乃木大將のお蔭であつた。

明治天皇には、その後も私のことを御宸念あらせられ、私がある陸軍學校に勤務してゐたときも、行幸のたびごと、校長に「櫻井の足はどうか、手の方はどうか」などと御たづねに預つた。たゞく恐懼の極みである。

「肉弾」は殆んど世界語に譯された。千九百十三年——第一次歐洲大戰の前年——カイゼルが、皇帝の名を以て、全軍に配布され、「これを以て日本軍人の精神を知れ」といはれた。堯國皇帝も同様のことをされた。

数々の光榮を荷つたのも、大將の御蔭であつたのである。

五 門をたゞく者

大將の家へは、随分若い者が来て「書生に置いてくれ」といつたものらしい。

日露役から歸られてからのちは殊に多かつたらしい。大將が二兒を失はれてから後は、随分書生志願の列がつゞいたやうだ。それを體よくことわるのに相當苦心されたやうだ。

ある冬の朝だつた、私が赤坂の邸へ訪ねて行くと、――

「櫻井！いゝところへ来てくれた。今困つとるところだ」といはれた。

時刻は七時だつたと思ふ。大將を訪ねて行くのには朝七時ころがよかつたやうだつた。

「七時ころがいゝな」といはれたことがあるので、私は、いつも七時を見當にして行つた。冬の日など、七時では早い、と思つたが、大將はチャンと軍服を着て出て來られた。

「何かございますか」

「實は、若い者が来て書生に置いてくれといつて、きかんのぢや。わしの内に今書生は要らないし、どうしても置いてくれといふし、困つたものぢや。一つ連れて歸つてよく言ひ聞せてくれんか。何でも軍人になりたいといふのだから、よく前途を誤らないようにの」

「その人はどこに居りますが」

「向ふの部屋にゐるのだ」

といつてツカ／＼と出られた。私はそのあとへ尾いて行つた。

そこは、玄關わきの小さな部屋であつた。見ると、かすりの着物を着た十七八の若い男が、板間の上に坐つてゐた。

大將は手をのばして、その男の手を取り、「立て、立て、坐つておちやいかん」といはれた。

男は立たうとせず、板に頭をすりつけながら、何度か頭を下げた。

「閣下からお話を承つたが、閣下もお困りだから、一應私と一しよに歸らう。閣下に御迷惑をかけてもいけないから」

私がかういふと、男はまだ何度か頭を下げてゐたが、ソツと立上がった。そして大將に向つて丁寧にお辭儀をした。その頬には涙が傳はつてゐた。

「前途を誤らんやうにの。しつかり勉強をするがいよ」

大將は、やさしくかういはれた。

私は、その男を連れて家へ歸り、いろいろと話を聞いた。軍人になりたいといふことだつた。

その男は、一旦國元に歸つた筈だが、どうなつたが、サツパリ消息を斷つてしまつた。

大將のいはれたとほり勉強をして、希望の軍人になつたかどうか、私は知らない。

煙のやうに現はれて、煙のやうに去つてしまつた。志望が叶へられても、夢のやうに忘れてしまふ

のでは、折角の大將の志も無になつてしまひ、口を利いただけがつまらんことになつてしまふ。

書生でなくても、手紙なり何なりで、學費の無心を言つて來たものも少なくなつたやうである。

世間には、あつかましい奴がゐるもので、困つてゐるから金をくれの、借してくれのといつて來る

ものである。手紙でしつこく言つて來て、人に何かしら考へさせるといふことがよくある。

大將にはキツとそれが多かつたことであらう。名を上げれば上げるだけ、同情乞食が寄つて來るものだ。

大將はよく人の面倒を見た人だから、それにつけ込む者も随分多かつたやうだ。

一度で行かなければ二度三度と手紙で「催促」をする。中には「これくらゐのことは、閣下に出來

ないことはなからう。してくれてもよささうなものだ」といつたやうな押賣するものさへあつた。一々そんなことを聞いておては、たまつたものぢやないが、大將はよく、その人等の面倒を見たものである。

「書生志願」の一人にTといふ男があつた。Tはむやみと手紙を大將に送つて、書生にしてくれる、字を書いてくれの、補助をしてくれのといつて、大將を困らしたものだつた。

大將は、それでもイヤな顔もせず、金を送つてやられたが、向ふからは禮狀一つ來なかつた。金が少ないとでも思つたのだらう。

大將はその後、Tの地方へ旅行したとき、Tのことをたづねられた。

Tはビックリして、大將の宿をたづねて、平あやまりにあやまつた。

そのとき、Tは見るかげもない姿であつたので、大將は不びんに思ひ、又金を與へられ、將來のことを何くれと心配してやられた。

Tはその地方で、あまりよからぬことをしてゐたので、人前へ顔を出される身分でなかつたのだつたが、それ以來生れ變つた人間になつた。

大將が自刃されてから、Tは魂の抜けたやうな人間になり、その後、間もなく土地を去つて行方が

わからなくなつた。

Tなどは上等の方で、如何な悪玉でも、大將の前へ出ては、改心しないでは居られないだらうが、Tはそれほどの人間でもなかつた見える。

全く見ず知らずの人に學資の補助をされたことすらあつた。

中にはその人の卓見に感じて、進んで研究費を補助されたこともあつた。その婦人はその中には學生もあり、學校の教員もあり、學者もあつた。某外國婦人さへもあつた。その婦人は

大將の凱旋後、名聲を聞いて無心したものであつた。

大將はたゞ一時の情にほだされて金をくれてやる、といつたやうな考へは持つてゐられなかつた。

Tのやうに、救けを受けた人が却つて何年かの後に大將からたづねられて赫い顔をしたといふこともあつた。恩を求めても、恩を思ふものは少ないものだ。

六 蘆花と書生

書生列傳の中に、見通がせないのは小笠原善平である。蘆花作「寄生木」の篠原良平こと、小笠原善平である。

善平生れは、岩手縣下閉伊郡山口村で、村長喜代助（寄生木では良助）の二男である。

喜代助は、村長として羽振を利かしてゐたが、村政上の争ひから相手方に陥られて入獄した。

六年もの未決で、結局は無罪で歸つたが、その間に、家も財も瘦せ衰へた。

善平は、父のことから中學へ入ることが出来ず、不平不満の日を送つてゐた。父の罪なきことを信ずる彼は、村人の仕打を怨み抜いた。

善平が大將の書生になつたは、大將（寄生木では大木）が、仙臺の第二師團長の時である。毎日官邸の門前に佇んでゐる書生があるので、不審に思つて、ある日、出勤のとき馬上からワケをたづねると、書生に置いてもらひたいといふことであつた。

大將は辭つたが、どうしても動かぬので、家へ引入れて、いろ／＼と家の事情などを訊ねてみた。

とうとう書生として住はすこととなつたのである。善平そのとき十六歳であつた。

それは明治二十八年の春であつたが、二十九年秋、臺灣總督に任ぜられ、善平もお伴して臺灣に渡つた。

「寄生木」にあるやうに、愛人篠原夏子（本名小笠原かつ子）と知つたのは仙臺時分で、その地の憲兵隊長だつた「篠原公輔」（少佐）に、大將が善平の身元調へを頼んだり、一身上について「直接」の世話を頼んだことから始まつたのである。

善平の小使錢も、大將からは渡さないで、少佐が預つて置いて與へるやうになつてゐた。

こんなことから、善平は篠原家へ出入するやうになつた。

善平は、將來士官になる志望であつた。

英語を、總督府外事課勤務の三好重彦といふ人（検事總長や、大審院長として有名だつた三好退蔵の長男）から習つた。

善平は頭がよかつたので、大將も大に望みをかけてゐられた。

官邸は、劉永福の家（もと臺灣の主權者）であつた。そこには書生としては善平ひとりだつたが、

守衛の安藤元節、憲兵小森秀次郎、總督府の給仕前田、木下の二人、馬丁頭谷田鎌次郎、他に二人、女中二人がゐた。

壽子母堂、靜子夫人は、官邸でこれ等の人を指圖して忙しい日を送られた。

給仕の前田は、大將の後任兒玉大將に愛せられて立身したが、若くして死んでしまつた。

善平は、家附の書生だといふワケで、前田等給仕に對しては自然優越の位置を占めてゐた。小笠原さん、小笠原さんとあがめ奉られるので、太だ得意であつた。

「オイ、前田！ これをそちらへ持つて行け」といつたやうに、頭で指揮するといつた按配で、前田等も、蔭では小笠原の悪口を言つてゐた。

一日大將が、「こんどコックに來た人は、何といふ人かの」といふと、「橋といひます」といつたので、「年上のものを呼びすてにするといふ法はない。橋さんといふものだ」とビシヤンと一本御面を食はされた。

「それ見ろ」——給仕たちの喜ぶことは。

威張る善平にも強敵があつた。それは二人の女中であつた。しよつちゆう、イザゴザが絶えなかつた。大きな聲をして毎日のやうに喧嘩をやつた。

夫人から「將來將校にならうといふものが、女中を相手にして喧嘩などしちいけないではありませんか」と、たしなめられた。

善平が東北生れのズーゾーなので、それが可笑しいといつてヒヤかすので喧嘩になるのであつた。善平も負けてはゐず、女中の頭にゲンコを見舞つたりすると、その罰は觀面に來る。

——その日はキツとおかすが悪い。おかすでかたきを取られるのだから、この戦さ善平の負けである。

臺灣にゐるころ、父の喜代助が無罪出獄となつたので、善平はヒマを貰つて一旦郷里へ歸つた。

歸つたものゝ、父や兄から、十分の學費も出なかつたので、又大將にすがつて補助を受けることゝなつた。

善平の苦學空しからず、明治三十一年、十八歳で東京中央幼年學校へ三番の好成绩で入つた。

善平が幼年學校へ入學したと聞いて、大將は、非常に喜ばれた。そのときは大將は臺灣總督を止めて（休職）那須野に歸つてゐられた。

祝狀を善平に送られた。その宛名の「善平」に「ヨシヒラ」と、假名を振られた。

善平が上京の途中、那須野に大將を訪ねたとき、玄關で女中（喧嘩をした女中とは代が變つてゐた）に「小笠原です、ゼンバイです」といつてゐたのを、大將が聞きつけて、「オイ、來たか。だが違ふぞ。お前はわしの手紙を讀んだか。名前に假名を振つてなかつたか」といはれた。

「ヨシヒラとありました」

「ヨシヒラとしたものをなぜゼンバイといふか。一人でゼンバイで、ヨシヒラなのか。一體ヨシヒラ

といふ意味がわかつとるか」

「——」

善平もヨシヒラの意味がわからず、大将もその説明もしなかつた。

しかし、日の経つに従つて、善平より、ヨシヒラの方がいゝように思はれ出したので、とう／＼ヨシヒラで通すやうになつた。

その時、後の愛人である夏子（カツ子）は十四歳であつた。幼年學校の在學中、篠原氏（そのとき中佐）は「君を見ぬいて娘の夏子をやらう」といつた。（といふことに「寄生木」ではなつてゐる。少し早すぎる話と思ふが）

善平は有頂天になつて喜んだ。夏子との間にも文通が許され、夏子は「小副官」などと書いては、楽しい未來の日を夢見てゐた。

ところが、幼年學校の成績がだん／＼悪くなつたので、かねての約束を消すといふ悲しい宣告が下された。學資の世話や、交際はこれまで通りするが、娘との縁はこれ限りと思つてくれといふのであつた。

千丈の崖から落されたやうな善平の悲しさ、苦しき、血を吐くよりもつらい思ひであつた。「エー、

どうでもなれ」といつた氣になつた。それも無理からぬことであつたらう。

美しい夏子、やさしい夏子、——それが、自分の未來の妻だと思ふと、大きな翼が生えたやうに思つてゐた。

その翼が折られたのである。善平に取つてみれば、泣くにも泣かれない思ひであつたらう。

明治三十六年十二月、士官學校を卒業し、三十七年三月目出度く少尉になつた。しかし、善平に取つてみれば、たど／＼しい足をこゝまで運んで來たやうなものだつた。希望も何もなかつた。

善平そのとき二十四歳、夏子二十歳であつた。

間もなく出征することゝなつたが、そのころから、篠原家でも少しヨリを戻して娘をやつてもいゝやうなことをいひ出してゐた。

それもハツキリしたことでなかつたが、善平に取つてみれば、何だか明るいものが目の前に光つて來たやうに思つた。

夏子は善平が嫌ひどころでないが、若い娘のことなり、そこは親のいふなりになつてゐるより外なかつた。縁を切つたといへば、そのとほりになるより外に仕方がなかつた。

ポツ／＼善平との文通も許されたので、戦地へ宛て手紙を出したり、手製の靴下などを送つたりし

た。

善平のうれしさは一通りでなかつた。

出征中申尉になり、三十八年無事に凱旋した。そこで善平から改めて、夏子を貰ひ受けたいと申入れたが、ハッキリした返事がなかつたのみか、その内「愚娘に對する縁談上御懇請に付、親類一同へ相談、彼是時日移り、申譯無之候得共、不得止次第も有之、何分相談相纏兼、小生に於ても赤面の至りに候得共、御申込の儀、斷然御取消被成下候はゞ幸甚」云々といふ手紙が届いた。

善平は、之を讀んで氣が遠くなるほどになつた。

「不得止次第も有之」「赤面の至り」——今となつて何たる言分かとフンガイせざるを得なくなつた。

「夏子も子供ではなし、本人は何と思つてゐるだらう——」かう思ふと立つて居ても居られなかつた。

善平はその悲しい胸を壓へて、手紙を書いた。

「幾年の後、我れ再び青葉かぐはしき麻布の邸を訪れ候折は、フム善平か來たか、ヨウこそ來てくれたと御面謁賜り度」云々と。

しかし、しかし、心では「君に娘を上げてもいい。君と娘を一しよにしたい、と言つたのはだれなのか。親戚が何だ。當人と親の心一つで定まることではないか。酔ふて父子とまでいつたではない

か。何故彼女に戦地へ手紙を書かせたのか。何故慰問の小包まで送らせたのか」と、善平は齒を食ひしばつた。心臓は裂けて迸しるかと思はしめた。

(あまりな皮肉な仕打だ。嘲弄も甚しい)

かう思うのも無理はなかつた。

「戦地で血の河を渡り、骸の山を越え、地雷彈雨を浴びて、劍の林を潜る時、我身ありとは思はぬ身も、善平は世に一人の戀人があるといふことだけは忘れなんだ。若し萬一命があつて故山に歸れたら結びの神よ、願くは、戀しい彼の人と借老同穴の縁を結びせ給へ、と我に命のあるを感ずることに、善平は祈つたのだ」

思うても、無念、哀しさ、善平は悶々の内に暗い日を送つた。

「寄生木」の筋は先づかうなつてゐるのである。「寄生木」は、善平が書いた記録を「多少の按排を加へ」たもので、善平の生の血の記録といつてもいいものである。

善平は遂に病を得て、四十一年休職となつて故山へ歸つた。涙なしには考へられないことである。

一時外國語學校の露語科に通つてゐたが、からだも思はしくないので郷里に歸つた。とうとう、四十一年九月二十日、二十八歳を一期として世を去つたのである。不幸な一生を終へた

ものである。

三八

「夏子のことさへなければ」——だれだつてかう思つた。

善平が得た愛は完全に踏みにぢられて、とうとう死への道を辿るやうなことにまでなつた。

善平が死んだとき、三丈にもあまる遺書が夏子宛に遺されてあつた。それは姉のお新さんが上京して夏子に渡した。

善平が陸軍大學へ入る見込がないのを見越して、娘をやるのをやめたともいふし、ある大實業家から望まれたので、縁を切つたのだともいはれてゐる。事實はどうか知らない。

善平が書いた記録は書くに従つて蘆花に送つた。ノート十冊にも及んだといふことである。蘆花は、わざ／＼善平の郷里へまでも行つて、詳しく調べたりした。

夏子のカツ子は、その後どうなつたか知らない。ある人に嫁したことだけはわかつてゐるが。大將は「寄生木」が出ると、書生に買ひにやられた。そして端から讀まれたさうだが、内容につい

て何も言はれなかつた。

七 魂の傳統

大將は江戸の水で育つたのである。

生れたところは、麻布日下窪の長府藩毛利邸内で、父の十郎希次が江戸詰であつたとき、麻布の谷底で生れた。嘉永二年十一月十一日正午であつた。

幼名は無^{なま}人、後源三、文藏となり、明治四年に希^{もと}典と改めた。

毛利邸は、赤穂義士岡島八十右衛門等十人を預つた所である。

父希次は、弓の名人で、十二歳の時、深川の三十三間堂で「通^{とほ}し矢」を射て、御馬廻に出世したほどである。

大將が十歳のとき、希次は、政務に關し、建白して（如何なることか不明だが）百日の閉門を仰付けられた。大將は徒歩で東海道を長府へ歸つた。

門の扉に青竹を十文字に交叉し、一切家人の出入を差止められた。

三九

希次はひどい痔持であつたが、百日の間袴を離さず、形を正して、座敷に坐つてゐた。大將は幼時、父の謹厳な態度を見て、ひどく心を打たれた。家計は至つて苦しかつた。米を挽いて鹽煎餅を造り、馬關に持つて行つて、日用品と交換したりした。

閉門後、藩主から再出仕を諭されたが、「刑餘不淨の身を以て君前に進調するは臣たるものゝ道にあらず」といつて固辭した。大將の性格はかういつた父の氣象を多分に受ついでゐたやうだ。いろ／＼と諭されたので、始めて百石で奉仕することとなり、世子の輔導役として、禮法、武藝を授けた。硬直、謹嚴を極めたといはれる。

大將が、後年學習院長となつたのも、そこに芽生えた。大將一代で出来上がった大將でなかつた。父君そのまゝに大將が培はれたのであつた。

世間では、己れひとりで出世したやうに思ふものもあるが、一代で完成したと思ふは誤りで、いつとはなしに、祖先の魂が水のやうに子孫の間に流れてゐるのである。大將の一生が、よくそれを教へてゐる。

大將の生れた北日下窪は三十番地に當るので、産湯の井といふものも残つてゐる。

寒稽古中は、希次が毎朝跣足で、霜の庭に立つて劍道を教へた。藩の世子に對してもその通りであつた。

一日、世子が食事のとき、飯粒を落されたのを見て、希次は嚴しく「若様ともあらうものが、飯粒を落されるなどは不行儀でございます。拾つて拜んで御召上りなさい」といつた。大將そのまゝの姿が父君の上に見られるのである。

大將は深夜、膽試しに引き出され、寺の縁を踏み抜いて、膽玉の潰れる思ひをした。

「膽試し」は、そのころ大流行はやりであつた。何しろ化物や何かで、小さな子供をおどかすのだから、大いなのが震へ上がったものである。

元治元年、十六歳のとき（そのときは長府に歸つてゐた）無斷家出をして、萩の玉木文之進をたよつて行つた。

大將は、あまり丈夫でなかつたので、文學者たらんことを志し、父君に請ふて萩の玉木先生のもとへ行かうとしたが、許されなかつたので、家出したのであつた。

ところが、玉木先生は「無斷家出するなどよろしからぬ。武士の家に生れながら武藝を好まなければ百姓をしる。百姓がイヤなら置くわけにいかぬ。立歸れ」といはれた。

夫人は折角來たのだからとて、一泊させたのが縁となり、鋤鋤の傍ら學事を勵むやうになつたのであつた。

玉木先生は、名を文之進といひ、經史、詩書、軍學、武藝に通じ、又常に農事を怠らなかつた。大將が那須野に耕すに至つたのも、先生の感化であつた。

玉木先生は一代の碩學であると共に勤王の士であつた。天保十三年學生を集めて塾を開いた。吉田松陰もその門下生である。

明治九年、前原一誠が兵を擧げたとき、門人數名が之に黨みしたので、先生は「これ我黨陶宜しからざるの致すところ」として自殺した。明治九年十一月であつた。年は六十七歳であつた。

大將の一生は全く玉木先生寫しの感がある。少年時代の感化はかくもあるかと思ふ。

「人間乃木」を作つたものは、玉木、素行、松陰の血の結晶であつた。どこから叩いても、寸分動きのない人間が大將であつた。完成した人間の姿であつた。

玉木家にある間、大將は草を刈つたり、種を蒔いたり、全く百姓暮しであつた。

夜は先生から、軍學の話などを聞かされた。

弱かつた大將も、メキ／＼とからだがよくなつた。

長府の父重病との報せがあつたので、玉木氏は「一足も早く歸れ、これはお前の父から送つて來た入費の餘りだ、明細書を見るがいゝ」といつた。

大將は、居候とばかり思つてゐたが、父がこれほどまでしてゐたのかと思つて泣けて來た。

十七歳（慶應元年）の秋から明倫館の文學寮に入つた。

文學寮ではあるが、大村益次郎が、軍事學の教官であつただけに、彈丸製造のことまでも授けられた。えらい文學もあつたものである。

寮は自炊だから、生徒が山へ薪を取り、水を流に汲まなければならぬ。玉木先生に鍛はれたからだも魂も立派に芽を出してゐた。

羽織を着たりするものがあると、寄つてたかつて袋叩きにしたものである。下駄の鼻緒だつて棕櫚しんろうである。キレのものなんか、ゼイタクだとされた。

大將は、ヒヤメシ草履に、筒袖といつた風だつた。

保典が使を吩咐かつたとき、支關でグヅ／＼してゐたので、勝典が「何をしとるのか」といふと、「鼻緒が切れたからたてゝゐるのだ」といつた。

すると「跣足で行け」といつてキメつけたことがある。

大將の少年時代の魂は、かうして立派に子供等にそのまゝ移つてゐた。

大將も人間のことだから、うまいものも食ひたからうし、いゝものを持ちたからうが、——ある時代は相嘗伊達なところもないではなかつたが、しかし、それも「ある線」から飛び出るやうなことは一つもなかつた。

何といつてもジミで、固くて、意コ地に見えるところさへもあつた。それほど苦勞もし、又鍛はれもした。それだけ、ガツチリとした信念があり、動かなかつた。

八 少年と少年

勝典も、保典も随分鍛はれたものだつた。毎日のやうに、竹刀でガン／＼叩かれた。

麻布に「振氣館」といふ道場があり、大將はその名譽館長だつた。大將は、そのとき第一旅團長だつた。

近所の子供たちは、素足で寒稽古に出かけた。道場といつても土間だから冷たい。ザク／＼と霜柱

を踏みながら、バチヤン／＼とやるのである。そこへ大將がお面、お小手と叩きに來るのだから、子供たちへとへとだ。

勝典も、保典も、この道場の土の上で竹刀がサ、ラになるほどやつたものだつた。

大將自身が、父から鍛はれたことを思へば何でもなかつた。

軍服で通したことも、一つの鍛錬の結果だつた。だれだつて暑ければ浴衣の一つも着たい。それを着ないで「兵隊は浴衣がけて喇叭が吹けないぞ」などと、ガン張つてゐたのも、そのヤセ我慢も、物好きなんかで出來たものではない。

明治八年の秋、習志野で、鎮臺と、教導團で野外演習をやつたことがある。

晝間の演習で疲れて、大ていのは宿舎につくのには、たゞひとり夜も演習を見に來る若い男があつた。雨が降つても、風が吹いても、一日も休まない。

「一たい、あの男はだれだい」

「あれか。ありや乃木といふ傳令使だ」

「フム、しかし、熱心なものだのう。四十九日間ブツ通しだ」

「さやう、ありや、並の男でござんせんわい」

そんな大將だつた。大ていのも——いや、だれだつて出来る藝當ではなかつた。それもこれも玉木魂、希次魂の再現だつた。

相撲を取つて怪我をしたとき、師の玉木先生何をいふかと思ふと、「癒つたら、またドシク怪我せしろ」

冷めし草履の片方が切れたので、捨て、歸つたところが、「なぜ捨てるか。ひろつて来い。畑の肥しにだつてなるぢやないか」といつた。

大將は小さいとき弱虫だつた、といふが、十二三歳のとき、フランスの軍艦がやつて来て、下關の砲臺を攻撃した。

唐櫃山へ、友達五六人と登つて見てみると、ツイ近くへ砲彈が破裂して土けむりを上げた。一發、二發、三發と飛んで來たので、みなビツクリ仰天して逃げてしまつたが、大將は平氣な顔をして突ッ立つてゐた。弱虫どころでなかつた。

旅順でも、あの十字砲火の中にも、木のやうに突ッ立つてゐられた。「大將には彈がよけて通るのか知ら」などといつたものだつた。

九 あの日、あの時

慶應二年となり、大將は十八歳となつた。その六月、大將は山砲一門の隊長として、豊前に出戦した。長州の敵を討つためである。(長州征伐)少尉でも中尉でもなかつた。

將校としての出發は二十三歳の少佐から始まるのである。

山砲一門隊長乃木は奇兵隊長山縣狂介(有朋)の幕下にあつた。乃木無人改め文藏のめざましい奮戦ぶりが名を高めた。

小倉城へ攻め込んだとき、焔々たる火の中をくゞつて一番乗りをした。

玄關に、金覆輪の鞍を置いたすばらしい馬が繋いであつたので、ヒラリと跨がり、トコトと山縣隊長のもとへ歸つて來た。

山縣隊長それを見て、——

「乃木！ そいつあ、どこから分捕つて來た？」

「こりや、私を乗せるやうに、チャンと鞍まで置いてあつたのです」
「馬鹿をいへ。そいつはおれによこせ」

といふわけで、隊長に取られてしまった。

乃木さんに乗せるために置いてあつたのではない。藩公（小笠原）が逃げるために、馬の仕度をさせたのだが、間に合はなくて退城したのであつた。

乃木さんもロアングリである。折角いゝものを分捕つたと、お得意になつて引上げたところを、スツポリ分捕られてしまった。分捕りを分捕られた乃木さん、悔しがつても、山縣さんにかゝつては手も足も出ない。

大將このとき、火の燃えさかる中を、真正面からドン／＼進んで行くので、一同驚いたといふことである。この戦争で左足の甲に負傷した。

二十三歳で一足飛びに少佐になつた。二十一歳のとき、藩命によつてフランス式調練を習ふため、伏見の御親兵營へ入隊してゐたし、その後、京都河東御親兵練兵掛として赴任したこともあり、軍人としての修業は、出来上がつてゐたのである。

そこで二十三歳の少佐が出来上がったのである。明治四年十一月二十三日であつた。

一足飛びに少佐になつた、といふとエライ出世のやうだが、山縣元帥は振出しが中將であり、一生にたゞ一度しか進級しなかつた。

その十二月、舊佐賀藩兵歩兵二中隊を率ゐて信州上田に至り、分營を設けた。

西南役で軍旗を失つたのは、十年二月二十二日で、大將が二十九歳であつた。

西南役で、左の膝に銃創を蒙つた。

四月二十二日中佐となつた。

十年十月には父希次が病死した。静子夫人と結婚したのは、明治十一年八月二十七日で、三十歳

（中佐）であつた。夫人は、薩州藩士湯地定元の四女である。

赤阪新坂町五十五番地——今遺跡のあるところ、——の家は、三十一歳の時で、八月二十八日長男勝典が生れたといふ記念でもあつたか、十一月、新邸を設けたのである。

三十二歳の春大佐に、三十三歳次男保典が生れた。

長男勝典、次男保典の可愛さに、身も心もとろけるばかりであつたが、しかし、二人とも軍人に仕立てようと思つたに違ひない。思ひ通り、二人とも軍人となり、大將と同じ戦場である旅順で戦死したといふことも、大將に取つてみれば満足であつたらう。たゞ大將自身が旅順で、二典と共に戦死し

たかつたに相違ない。同じ旅順の草の上に三つの死體を並べてこそ、申譯が立つと思つたに違ひない。それほど、旅順戦は大將には大きな痛手であつた。

一〇 悲風田原坂

今は、小倉の造兵廠の中へ入つたが、もとそこには、歩兵第十四聯隊の兵營があつた。大將はそのとき少佐で、聯隊長心得であつた。そのとき西南役（明治十年）が起きた。田原坂で失つた軍旗はこの聯隊である。

大將の遺言には「明治十年の役に於て軍旗を失ひ、その後死所を得度心掛候も其の機を得ず」とある。

軍旗を失つて以來、大將は全く性格も變り、悶々の日を送つてゐたに違ひない。

日清役（明治二十七八年）のときも、左右がいくら止めても、前線へ飛び出して仕方がなかつた。日露役（明治三十七八年）も「大將は死ぬるつもりだな」と思はしめたやうなことが何度もあつた。

彈に中つて死にたいと思つても、彈の方はさう注文通りに飛んでは來ない。「死にたい」と思う大將には、とうとう一つも中らず、却つて兩兒を失ふやうな結果となつた。

西南役で足に負傷し、博多の病院にゐるときも、スキさへあれば飛び出さうとした。ある晩、大將の姿が見えないので大騒ぎになり、八方搜索したところが、大將は痛い足をひきづりながら、厩へ行つて馬丁に吩咐し、からだを馬に縛りつけて、外へ出たといふことがわかつた。

同僚たちが追つかけて、途中から引つばつて歸つて、無理に寢臺へ寝かしたことがあつた。

軍旗を取還さう、もし出來なかつたら、賊中へ斬り込んで死なう、といふつもりであつたらう。

「身傷いて死せず却つて天を怨む。嗟、吾れ薄命誰と與に語らん」と、大將の詩にあるとほり、大將は幾たびか死所を得んとして死せず、涙を吞んで悶々の日を送じた。

明治十年二月二十三日である。切るやうな風が吹く。乃木聯隊長は植木口に向つたが、賊勢はつるばかり、左右より乃木聯隊を包圍せんとした。

聯隊は止むなく、田原坂に退いた。そのとき旗手河原林少尉は、軍旗を竿より外し、腹に巻き、塚伍長外卒十名と共に退却した。

田原坂に着いたころは、スツカリ夜に入り、ヒュウ／＼と冷たい風が、物悲しく吹いてゐた。

「河原林！ 河原林！」と呼んだが、聲はなかつた。九時も、とつくに廻つてゐた。

河原林少尉は、敵中に斬り込んだといふものもあり、或は敵の手に落ちたのだらう、といふものもあつた。

大將の驚きは一通りでなかつた。

「わしが取還して来る」といつて、飛び出さうとしたが、無理矢理に引止めた。

當時東京、大阪の鎮臺兵はまだ九州地へ渡つてゐないときであり、若し乃木聯隊が全滅したら、賊は押して下關を渡つて来るかも知れぬ形勢にあつた。

乃木聯隊長は、涙を吞んで思ひ止まつたが、死よりも悲しい痛手であつた。鹿兒島人と交はつてゐる場合でも、いつも一目下がつてゐられたといふことでもわかる。心中察するに餘りある。大將そのとき二十九歳であつた。

軍旗は失つたまゝではすまない。大將が「待罪書」を出したことは申すまでもない。が――

「軍旗の喪失は不得止の場合、殊に旗手も戦死を遂げたるに依り其儀に不及」といふ有難い御聖断によつて、二度目の軍旗を授けられたのである。

軍旗は如何に破れても、損じても、それは戦功を物語るものであり、外國の軍旗のやうに、汚れた

から取替へるものとは、立前に於て全く異なつてゐる。

軍旗の樹つところに 天皇陛下が在します、といふのが日本軍隊の信念である。軍旗の下で戦ふことは、それが直ちに 陛下の御馬前で戦ふのである。

外國の軍旗は「隊の目じるし」であつて、我國の軍旗は「軍隊の魂」である。その魂の取替へはなほい筈であるが、歩兵第十四聯隊のみは、特に戦功を思召されて再親授になつたのである。大將の感懐は如何ばかりであつたらう。

聯隊は舊城址（小笠原家）の中に建てられてあつた。今もいくらか昔の城の面影を残してゐるが、日本最古の兵營の一つである。

營庭に龍の伏したやうな老松がある。（今もあるかどうかかわからないが）大將が、この松のそばでよく練兵を觀てゐたといふ言ひ傳へがある。大將が無念の歴史の添ふ聯隊ではあるが、「乃木大將觀兵の松」として、いつまでも榮えさせたい。

聯隊に十年役の「陣中日誌」が保存されてあるが、大將はそれに朱筆で丹念に手を入れてある。今はどこに保存されてゐるだらう？

酒保に、大將の油繪がかけてあつた。これも今はどうなつた知らないが、何でも十年役のところ、だ

れかが描いたものださうだ。うどんや酒の匂ひを嗅ぎながら、兵隊と一しよにゐられるところに、大將らしい趣がある。

聯隊にこんな話が残つてゐる。——ある年のこと、ドイツの戦術家メッケル（日本軍がドイツ式戦法を採用するやうになつてから傭入れた人で、陸軍大學の教官でもあつた）が、小倉附近で、將校の現地戦術をやつたとき、演習員の一人であつた乃木少佐は、敵の方向を誤り、敵を後ろにして、前哨線を張つたので、メッケルからお目玉を頂戴した。ところが、負けん氣の大將は、「敵に尻を喰らはすくらゐでなけりやいかん」といつて、一同を笑はせたことがあつたさうだ。

一一 軍旗の所在は

ところで、田原坂で奪はれた軍旗は一體どうなつたのであらう。

賊の手に渡つたにしろ、所在がハッキリしてゐるものなら、再び官軍の手に還るときもあつたであらうが、二度目の軍旗を授けられた以上、どこでどうなつたかわからない、といふのがホントウであ

らうやうに思ふ。

ところが、こゝに不思議なことを發表した人がある。その人は岩切某（八十歳）で「その軍旗こそ私が奪ひ、その所在もハッキリ致して居る」といふのである。

熊本鎮臺司令官谷干城が、小倉、福岡の部隊に、熊本城へ集合を命じたのは二月十四日であつた。

乃木隊は、強行軍を以て植木村（熊本より六里）に到着したときは、夜も更けて居り、兵隊も疲れ切つてゐた。

そこを賊兵が急襲したのである。こちらは僅かに二箇中隊、賊は數倍する兵力であつた。

月は皎々としてゐた。乃木聯隊非常に不利となつて退却した。その時である。

暗い低い藪かげに人の氣配がしたので「エイッ」と頭上から斬り下げた男があつた。それが、岩切老、そのとき二十三歳といふ壯漢であつた。

斬られた相手は士官であつた。岩切は一つ記念に劍でも取つてやらうと、腰のあたりをさぐると、何だか服の下から、キラ／＼したものがはみ出してゐた。

その士官が河原林旗手であり、そのキラ／＼したものが軍旗だつたのだが、岩切、それを知らなかつた。

軍旗だといふことに気がつけば大した手柄だったのだが、月明りにすかしてみると、旗には違ひないが、何だかわからなかつたと見え、「こいつ旗持だったのか」くらわに考へたゞけであつた。その時、そばに立つてゐた男があつた。

「こりや、一つわしが預つて、本隊へ届けてやらう」

といつたので、岩切も、それが大切な分捕品とは氣づかないので、

「よし頼んだぞ」

といつた切り走り出した。

「本隊」といつたので、岩切は、自分の隊（伊東隊）とばかり思つてゐた。

その男も慣々しくやるので、すつかり自分の隊だとばかり思ひ込んでしまつた。

ところが、あとになつて、その旗が別の隊（村田隊）にあることがわかつた。

岩切は「士官を斬つたこと、キレイな旗を分捕つたこと」を隊長に話すと、隊長は、デングリ返らんばかりに驚いた。

「岩切！ ツヤ、何をしとるか。ありや何だと思つとる。官軍の軍旗だぞ 天皇陛下が下し賜うた軍旗ぢやぞ。その名譽ある軍旗を分捕りながらおめ／＼と他隊の者に渡すといふ法があるか。馬鹿ッ、

間抜けッ」

何といはれても仕方がない。隊長は涙をポロ／＼流しながら、地團駄を踏んだ。

「さう言うたとして、そのとき、そんなことなんかに氣が廻るもんな。命がけの仕事をして居つた時ぢやつど。生きるか死ぬるかもわからんときに、名譽の何のと、あと／＼のことなど考へるヒマはこわんぢやつた。さういふなとてぞけんしますすかな」

何といつたところで、あとの祭りだ。村田隊へ引渡しを交渉したが、渡さうといはない。

それで折角の功が他隊に奪はれてしまつた。現に軍旗がその隊にある以上、岩切の言ひ分が何であらうと、通る筈がない。

ところで、その軍旗がどうなつたかゞ問題である、

軍旗は西郷の實見に供へたといふことである。逸見十郎太はこれを先頭に押立て、馬上豊かに熊本城の前を駆け廻つたといふ話もある。——事實かどうか？ この尊い軍旗が西郷の目に止まつた以上、そんな扱ひはさせなかつたと思ふが。

薩軍でも、村田（三助）の功にしてしまひ、村田が戦死したとき「この軍旗は、村田の殊勳を物語るものであるから、村田家に興へて家寶とせよ」と、薩將桂久武が筆を取つて、「村田三助分捕」と

旗に書き記し、遺髪と共に、鹿兒島にゐる妻佐和子のもとへ送り届けたとなつてゐる。

これが既に怪しいと思ふ。尊い軍旗が如何に村田の名譽の分捕（でないのだが）にしても、それを妻に與へるといふ法はないと思ふ。

これも、露國皇太子が來朝するとき、西郷がロシアから歸つて來る、といふ噂で賑つたやうな種類の話ではなからうか。兎に角眉唾ものである。

それどころではない。戦後、鹿兒島市内の牢には、薩軍の將卒がたくさん收容されてゐたが、たまに薩兵の口から軍旗が村田家にあることを漏した。それを聞いたのは折田三之助といふもので、早く娑婆に出たい一心から、軍旗の所在を獄吏に密告した。

ソレツ！ とばかり、村田家へ押込んだが、「軍旗はとつくの昔、焼き捨てしまつた」と、薩摩ッ子だけにキツバリ言つてのけた。

家宅搜索をしたが、見出せなかつた。ふだん佐和子は、自身の肌に巻きつけてゐたが、身體検査でもされてはと、夜具の中へ縫ひ込み、實家の大山家へ移し、それから亡夫の老家、枝次家へ送つてあつた。

警察では、佐和子を監獄にブチ込むところまで行つたので、佐和子もとうとう／＼自白した。

軍旗は枝次家から取出されたが、それはまぎれもない乃木聯隊のものであつた。

といふのが岩切翁の實話となつてゐるのである。甚だ井然とした話なので、ウツではあるまいと思ふが、芝居がかつてゐるところも多分にあるやうに思ふ。

「聯隊旗は鹿兒島に於て官軍の手に戻つたが、今は陸軍の倉庫に藏められてある」といふ記録もある。全く行方を失つたので、第二代の軍旗を賜つた、といふことにもなつてゐる。

果して、官軍の手に戻つたのかどうか。事實を掴み得ない。

一一一 兒玉と乃木

大將が、伏見の練兵所（御親兵兵營）にゐたところの話が残つてゐる。

「乃木はとても無細工な男で、鐵砲さへヘンテコに擔ぐので、よく叱られたものだ」と、いふことである。

そのころの生徒の中には、時計の見方さへわからないのがゐて、針の二本あるのを不思議に思つて

一本でよさうなものだなどとすましてゐるものがあつたくらゐである。

二に二を乗けたら四に間違ひなくとも、 $10 \times 10 = 100$ といふ洋算が呑み込めないものがあつたりした。そこへ持つて行つて、西洋流の兵學を教へるのだから、大抵の苦勞でなかつた。號令でも何でも翻譯であつたり、原語であつたりしたのだから、それだけで、生徒は頭を痛めた。

明治四年大將は豊浦藩の陸軍練兵教官となり、御親兵や鎮臺兵を教育したが、そのころのフランス式教練は、一に傳習帳に書き止めさせたもので、まだその頃の帳面が何かの機會に見ることもある。ある帳面から二三引抜いてみると、――

輕野砲車の名稱については、――

輪 ラート

腔 シール

總身部 チュツク

車身 アリイトレーフ

などであり、

三兵將帥 ゼネラル (陸軍御奉行) (當時は歩、騎、砲の三兵であつた)

歩兵頭 ホーフドラヒシール・コロネル

大隊司令官 バタイロン・コンマンタン

中隊司令官 (差圖役) カピタン

偶數小隊司令官 第一ロイテナンド

その頃は、フランスやオランダの御備教師だつたが、そのオランダの先生が、今日はその生徒にサ
ン／＼ときつけられてゐる。兵術は教へても、魂の方は日本製だつた。

大將は、フランスやオランダ式でやつても、魂の方は乃木式で鍛へ上げた。

昔は演習でも、勝敗をハッキリと極めたものである。甲軍勝利、乙軍敗北といふわけで、勝つと大
祝ひをやつたりしたのである。

戦争ならそこはハッキリ極まるが、演習でも、五分五分とか、四分六とか、随分細かく審判(講評)
したものである。

大將が歩兵第一聯隊長のとき(明治十一年)兒玉(源太郎)さんと、習志野で對抗演習をやつたこ
とがある。兒玉大佐はそのとき、佐倉の歩兵第二聯隊長であつた。

兒玉軍は帽子に白い日覆を冠せてゐた。(そのころは、敵味方を區別するため、一方軍は日覆をつ

けたものである。

兒玉さんは一策を案じ、見物人に白い頬冠りをさせ、それをあちらこちらと引廻して、乃木軍の眼をくらまさうといふのである。

見物人も、そりや面白いと、兒玉さんのいふなりになつて、乃木軍のうしろへ廻つて行つた。

乃木さん眼鏡を出してみると、——尤もその眼鏡も上等でなかつたと見え、大部隊がドン／＼うしろへうしろへと廻つて來るので、乃木さん困つてゐるところへ、正面から本物の部隊でグ／＼打ち上げたので、乃木軍はスツカリ兜を脱いでしまった。

その審判が、七分三分といふことであつた。兒玉軍七分、乃木軍三分といふ成績であつた。

喜んだのは兒玉さんだ。早速と、「キテン（希典）の利かぬノギ（乃木）ツネ（野狐）を、七分小玉（彈のこと）で打ち上げた」といふ歌を作つて、それに節をつけ、兵隊に歌はせながら、佐倉へ足も輕げに歸つて行つた。

そのころの彈は目方で計つたもので、五分玉、三分玉などといつたものである。七分の勝利だから「七分小玉」とやつたのである。「キテンの利かぬ野狐」とはひどいことをいつたものである。

單のやうな兒玉大將、——後の滿洲軍總參謀長として、剃刀のやうな切れ味を示したが、昔はこん

なことがあつた。

それが、露軍を「七分兒玉」で打ち上げてしまった。

乃木大將は、旅順の難所に切つかゝつて一通りならぬ苦戦をつゞけた。兒玉さんが旅順まで來て、「早く何とかして落さなくちや」と、マア催促みたやうなことになつた。大將の心中を思うと涙あるばかりである。

これが兒玉さんなら、支那人の百萬もせり出して、ヌラッセル（要塞司令官）の目をデングリ返したかも知れない。

「キテンの利かぬ野狐」が、旅順で「七分玉」と顔を合せなければならなかつた。

兒玉さんは、乃木大將と一しよに何日か山の上で暮した。

一三 旅順陥落半日

赤ウラのマントを、寒風にひるがせながら馬を戦線に馳せてゐた大將、——

日清役（明治二十七八年）には、第一旅團長であつた。

聯隊長としては、第一聯隊長、旅團長としても第一旅團長、二つながら一の字であつた。第一聯隊第一旅團といふのは昔から秀才の据はりどころとなつてゐるのである。大將もその「一」の位に納まつてゐた。

師團長は、獨眼龍山地元治といふ豪傑であつた。而かも向ふところは旅順であつた。十年後大將は又再び旅順にかゝつた。餘程旅順に縁があつたものである。

頃は十月であり、山も野も秋色に満ちてゐた。滿洲では、夏から一足飛びに冬になるので、「秋」の季候はないといつていい。十月となればもう「冬」が歩いて來たといつていいかも知れない。

十月二十四日、花園口に上陸した。花園口は、軍事探偵鍾崎、藤崎、山崎三人（三崎）が上陸したところである。三崎は捕へられて金州城外で斬られた。大將はその刑死のあとを弔ひながら、金州街道を南に向つて前進した。金州まで三十里である。歩兵第一聯隊、騎兵一中隊、砲兵大隊（一中隊缺）を率ゆる前衛司令官であつた。

十一月となり、寒さは骨を刺すやうである。

金州附近で、大將は大熱に冒されたが、前線へ行くといつてきかなかつた。防寒衣を師團長から贈

られても着ず、襦袢を着たまゝ横になつてゐるので、我慢もいゝが、病氣の方は、遠慮なく進んで行つた。

それでも第一線へ出るといふので、副官が、軍醫部長（菊池常三郎、外科の名手、醫學博士）にたのんで、ヤツと思ひ止まらせてもらつた。

そのころ旅順は、陸正面に十一砲臺、海正面に九砲臺あり、百門の巨砲と、二萬の守兵を以て東洋第一と誇つてゐた。尤も支那の「東洋第一」はアテにはならない。その筈である。十一月二十一日の夜半に總攻撃を開始し、翌日は早や日章旗が全山に翻つたのである。

それでも敵の死傷は四千五百もあつたが、こちらは、二百八十に過ぎなかつた。十年後の旅順では死骸の山を築いたが、「東洋第一」といつても、大砲も、砲臺も舊式のものばかり、支那兵が「逃げる兵隊のサンプル」と來てゐる。「一日」は早過ぎたが、フランス提督クールベールが「この地を陥れんには、五十餘隻の堅艦と、十萬の銃兵を以てするも尙半年を要せん」といつたのを、たつた一日で落したのでは、クールベールにも氣の毒だつた。

軍司令官は大山大將であり、師團長は山地獨眼龍元治、第一旅團長は乃木少將、第二旅團長は西（寛次郎後大將）少將、混成旅團長長谷川（好道、後の元帥）少將といふ顔振れであつた。

五千の兵と、三十門の砲とで守つた金州も、山地將軍の一喝で陥れ、直ちに旅順へさしかゝつた。一萬六千の兵と、約五十門の砲を以て、十一月十七日金州を發し、二龍山、椅子山を目標として進んだ。大將も共に進んだ。少し無理と思つても大將にはかなはない。

午前十一時ころには早くもこの二砲臺が沈黙した。早すぎるやうである。山地將軍は「黄金山を抜けば全線總崩れとならう」といふので、主力をこゝに注いだ。果して午後五時之を占領すると、敵はサンクトの體で逃げ去つた。うしろは海だ。どうせフカの餌食となつたであらう。

支那軍の前へは、三百メートル以内へ近づけない、といふ話があつたものだ。かういふと、支那軍大變強いやうだが、近づいて大いにブツタ斬つてやらうと思つても、近づくまでに、逃げてしまふから、三百メートル以内に入れないといふのだ。モノも取りやうによるが、その頃の支那兵から見れば今の中央軍などはさすがに訓練が出来てゐる。敵を侮つてはいけない。敵を知ることが大事である。「相當のもの」であればこそ、難戦もし、苦戦もあるのである。

大將しきりに馬を第一線に乗り入れるので、ハラ／＼させた。敵弾が少將のマントに三發も中り、馬も傷いたほどであつた。山地將軍も、「乃木のやうな勁勇も、思ふに軍中の持て餘し者といふべきであらう」といつたくらゐであつた。

常に死所を求めようとした姿が目に見えるやうであつた。

大昔の支那軍の旅順が半日で落ちたは仕方ないとしても、裝備滿點の、シンガポール、香港が二日や三日で落ちたのは、英軍なんかだらしないものだ。

乃木大將の白ズボン、赤ウラマント(その頃の服装であつたが)は、イキな姿に見えた。

大將は、スンナリとした姿勢であり、頬髯などの具合は如何さま武人らしいが、どことなく、スツキとしたところがあつた。

マントの端を肩にかけて馳るところが、よく、そのころの人の話題に残つてゐる。

二十八年の四月、陣中で中將となり、第二師團(仙臺)長に補せられた。四十七歳であつた。何しろ人間の働き盛りであり、ハツラツ颯爽たる姿であつた。

臺灣征伐が始まり、乃木師團は金州を發し、その秋から春にかけて、處々に轉戦した。その後臺灣總督となつたのも、この時に縁が結ばれてゐたといつてよからう。

二十九年四月、仙臺へ凱旋した。

臺灣征伐中、某氏に贈つた手紙の中にこんなことが書いてある。(その中のきれ／＼を)

一、過日來東南地方、廣東人種にて客家族と申す猾賊討伐に相掛居候處、兩三回の戦闘にて散亂

致し、尙首魁追捕中に有之候。

二、臺南城直東七十餘清里の處に、熟蕃社有之、餘程の猛惡種族と相考、我兵其近傍迄參候處、彼等は大得意にて出で來り、已に臺灣は日本領となり、日本軍の來るを知り、百數十年來怨恨ある所の支那人を驅逐するは此時なりと申合せたる由、此西長以下の社長四人呼寄せ、面會仕候處、其勇壯質樸甚だ可愛者にて、夫々申聞け、今後は支那人と雖も敵視せず、爲日本國力を盡し、皇室を尊敬し、信義を守るべく誓約し、歸社爲致候處、又々此度は御禮物と唱へ、牛鶏其他豹皮、奇木の板、鹿肉、奇鳥、奇獸を荷ひ、多人數故、度々御馳走に相成ては御氣の毒とて、各米を負ひ、途中支那人の部落を通過する故、二十挺の銃と、數十の槍を持ち、總勢百四十餘人出掛けて參り候故、其返禮旁鹽を與へ候處、久敷之を得ざる事逆、何よりの喜び、至極面白く云々。

三、酋長に其地方より十三四の男子を選び、差出候得者、我等召使ひ、日本語を教へ度と申聞候處、早速に承諾し、彼の嫡子十五歳なるを此度連來り、其外も一人志願者あり、其儘留置き飼ひ立て中に有之候。

「支那人と雖も敵視せず」といふくだりなど、大將の豁然たる腹中が見えてゐる。

蕃族を服するには、魅力がなければならぬ。大將には溢るゝが如き愛情があり、燃ゆるが如き勇氣がある。蕃人共が支那人部落の危険を冒してまで、百數十人連れ立つて大將に貢するなど、酋長がその子を大將に托すなど、これら野獸の如きものすら、大將の前には全く羊の如くなつてしまつた。宣撫工作といふことも、大將は既にこのときに大きな關心を持つて居られた。總督として此地に赴いたとき、最早、蕃人共が父が歸つたやうに思つたのも當然であつたらう。

一四 乃木一人のもの

臺灣から仙臺へ歸ると、勝間田知事の主催で、歡迎會があつた。

きれいだころをたくさん會場へ入れて、大にもてなさうとしたのであつたが、大將はそれを知つて「そりやいかん。藝者はこまる」といひ出した。

白井副官（後の乃木軍參謀）などは「閣下、さうやかましくいはなくてもいゝでせう。折角戦地から歸つて來たのだし、知事の厚意ですから」と、藝者出場に賛成したが、大將は、どうしても承知し

なかつた。「ヤボな乃木さんだ。わたしたちがお酌に出ちやいかんなんて」と藝者たちも、青い眉を上げてブツ／＼いふといふ有様。

大將は、給仕や小使を狩り集め、お酌をさせた。若い士官たちは、手の黒い小使なんかのお酌ぢや飲むにも飲まれない。

藝者たちは別のところに置いてあるのだが、出ることも出来ない。チョイ／＼白い顔を突出しては目にものをいはせて、若い士官に相圖するといった按配。

大將は、一通り挨拶もすみ、六五杯も盃を重ねると、副官に「あとはよろしくやれ」といつて歸つてしまはれた。

大將が會場の門を出たが、出ない内に、ワーと歡聲が若い士官達の間此起つた。そして藝者たちがバツタのやうに飛びついて行つた。

大將はチャンと粹を利かして歸つたのである。一應のことはキチンとやる。自分は自分として信ずるものを守つても、それをどこまでも人に押しつけようとはしなかつた。

酸いも甘いも知つた人である。決して石のやうな人ではない。大將とても木石ではない。若いころにはよく酒も飲んだし、人並に遊びもした。

三十歳の正月(中佐の折)の詩に、――

又 値^二佳 春^一 張^二酒 兵^一、
去 年 百 戰 死 餘 生、
絲 々 聲 細 新 橋 雨、
醉 向^二妓 軍^一 歌^二太 平^一、
といふのがある。

豪壯にして纏綿たる詩である。「酒兵を張る」といふあたり、若い日の面影が躍つてゐる。實に「愉快な大將」であつたであらう。

豪壯なる一面に「絲々聲細新橋雨」の情緒がある。この詩の中に大將の風格が存分に現はされてゐる。――強くて優しかつた。ねばり強くあつたが、涙にもろかつた。勇略の人であると共に、情操の人であつた。

奇人でもなければ變人でもない。當り前の人である。その當り前が一足すべると、取り返しがつかない。その一足の違ひが、偉人ともなり、聖人ともなるのだと思ふ。

大將の御通夜の晩、長谷川元帥が「乃木とは、昔よく飲みに行つたものだ。家にかへつてみたら、

いつのまにか、羽織がなくなつてゐたなどと、いふこともあつたよ」といふ話をして一座を笑はせたことがある。

そんなときから人間乃木が出来たのであらう。

「實ニ予ノ如キモ、明治十三、四年ノ頃迄ハ、或時ハ主動者トナリテ、料理屋ニ宴會ヲ開キタリシハ今更慙愧汗顔ニ堪ヘズ」

と、記されてゐるからである。

一旦「これはいけない」と思はれたときがあつたに違ひない。それがいつ頃であるかわからないが、仙臺師團長のとき、すでにさうであつたし、いろ／＼な點から察して、日清役前後でないかと思ふ。

「予の如きも」とあるところに味ふべきものがある。大將自身の口を藉りていへば、「自分のやうな融通の利かない、變屈者にも昔は」といつたところが見える。

「昔はやつたものだよ」これくらゐのことがない人間は、始めから變屈に出来てゐて、右も左も動きの取れない人間である。

「たん「これは」と思つた以上、決して曲げないといふところに乃木の乃木たるところが見える。

であればこそ、仙臺の歡迎會でも、折角のことながら、それで押し通した。だが、人まで自分の通りやれとはいはない。

こんど來た新任の知事は釣道樂だと聞いて、俄かに太公望を氣取つてみせたり碁が好きだといふと碁を始めてみたり、字が好きだといふので俄か手習をしたり、知事公の機嫌を結ばうとするものが出る。かういふ人眞似はいけない。「乃木は自分だけのものだから」といつた氣持は一生を通じてあつた。人に求めても出来るものと、出来ないものとあり、却つて「迎合」や「媚態」に陥り易く、人を誤るものとされた。

「自分だけのものだ」といふのが、大將の一生涯を通じて、われ／＼に映るのである。

日露役後、兩典氏（勝典、保典）のため、芝の紅葉館で追悼會が催された。會するものは第三軍の將士であつた。

しめつばいやうな、賑かなやうな會が夜更けまでつゞいた。當時の幕僚白井、津野田兩參謀などハメを外して大に飲み、大に談じ、懷舊談に花を咲かせた。大將も思はず盃を重ねた。

紅葉館のことがあつてから間もなく、歩兵第三聯隊長田中大佐（義一、後大將）が幹事となつて、陸海軍上長官懇親會を、紅葉館でやることとなり、乃木大將に出席を請うた。

ところが、大將の返事はかうであつた。――

「陸海軍上長官懇親會御催しの由、欣抔此事に存じ候、老生輩も押して出席願度候へ共、紅葉館と承り歎息の外無之候、水交社、偕行社有之候得ば、兩所の内に於て御催し相成候へば、愚者の欣喜此上なく候」

勝典、保典の追悼會を行つた同じ紅葉館でやらうといふのに、「歎息」とは心得難い話であるが、大將は、紅葉館を料理屋とは思はず、貸席か何かと思ひ込んで行つたところ、――始めてゝあつた。――藝者とも、踊子ともつかぬ女がゐたので聊か驚き、ひどく後悔された風であつたが、そのときはそんな感情を面に出さず、一同と心よく昔話をして別れたが、――尤も兩典氏の追悼會であつたからでもあらう、――其後は一切紅葉館は勿論、素性の分らぬところへは足を向けられなかつた。さてこそ、懇親會場が紅葉館と聞いて、歎息されたわけである。この手紙は、田中大將の應接間にかゝつてゐたが、今はどこにあるだらう？

一五 獨立を以て懼れず

ある年の正月に、――そのとき三十七歳、大佐であつた。――舊藩主毛利公の邸へ年賀に行つたところが、年の數だけ雑煮餅を食へといはれたので、負けぬ氣の大將、大きな餅を三十七個も平げた。――呑み込んだやうなものだつた。

匂ふやうにして家へ歸つたが、腹が張り裂けさうなので、軍服の胸を開いたまゝ、柱に凭れて一晩中動くことも出来なかつた。

何にでも負けてゐなかつた。人のすることなら、何でもやるといつた風だつた。それも仕過ぎるほどやつた。「乃木は體が弱い」の何のといはせなかつた。

一生瘦我慢で押し通したといつてよかつた。

大將は小さいとき、父（希次）が毛利公に諫言して御勘氣を受け、閉門された時のことを、一生忘れなかつた。門前に竹矢來を結ばれ、一步も外に出ることが出来なかつた。とき／＼隣りから抜け出

たりしたが、その閉門の苦しい生活が、大將の骨身に沁み通つてゐた。

あのときのことを思へば、何でも出来ないものはない、と思つてゐた。

あのとき、藩の仕打を怨む、——さういつた氣持もないではなく、當然とは思へなかつた。

君側に侍べる佞奸共を退けるために死を覺悟の諫言であつた。死は恐れない。思ひが通れば御家は安泰であつた。それが容れられず、却つて閉門を仰付けられた。

「正を踏んで畏れず」——これは大將の一生を通して寸分も歪みのないところであつた。

大山陸軍卿が洋行から歸つた當時、ある日、村木副官（後の中將村木雅美）を従へて、セビロ姿で歩兵第一聯隊の營門を入らうとしたので、歩哨が拒絶した。

結果は歩哨が中隊長に罰せられた。たとひ私服にし、陸軍卿を入門させぬといふのは不都合だといふ^{かど}廉で。

ところが、それを知つた聯隊長乃木大佐は、烈火のやうに怒り、中隊長を嚴罰した。苟も陸軍卿とあるものが、私服なんかで神聖なる營門をくゞらうなどは不都合極まる。歩哨こそ正しい、といふのであつた。「易經」には、「君子以獨立不懼」とあるが、大將は正にその「獨立」氏であつた。ある年の元日に東京の電車がストライキを起した。

多くの人は仕方なしに歩かなければならない。新年ではあり、ブツ／＼小言をいひながら歩いたものである。大將は「ストライキもいゝものだね。かうして歩くといふことは願つてもないことだ。車掌に御禮をいつていゝ」といつたことがあつた。

「人間が歩くことを忘れるから弱くなるのだ。電車や自動車があるからいけない。これさへなけりやどうしたつて歩くより外にない。それで決して不都合でもなく、人間が丈夫になる」

旅順の攻城山（攻圍の最後まで重砲陣地のあつた所）へ行くのに、きのふは馬で行つたから、けふも馬かと思つて仕度をしてゐると、歩いて行つたり、翌日は徒歩かと思ふと、馬であつたり、「我まま」のやうに取られぬでもなかつたらうが、大將には、大將のつもりがあり、人には一寸受取れない茶味があつた。こんなことからこちらで面喰つたこともあるやうだ。

人に歓迎されたり、チャホヤいはれることが大嫌ひであつた。

宿に泊つても、人と特別の扱ひをされると却つて苦い顔をされた。福岡の榮屋旅館は九州へ旅する大官の大てい泊るところとなつてゐる宿だが、一度大將が泊られるといふので、土地の女學生が、立派な坐蒲團を作つて上げた。ところが大將は「板の間なら兎に角、こんな立派な疊が敷いてあるのにきれいな坐蒲團などいらぬ」といつて、その坐蒲團を床の間に置いて、一度も敷かずに行つてしま

はれた。

女將曰く「大將ほど扱ひにくい人はない」と。——或はさうかも知れない。對馬へ檢閲に行つたときも、ランチを門司へつける筈になつてゐたのを、急に下關につけよと命じて、出迎への人をまいたことがあつた。かういふ話は、随分大將にあつたことで、いつでも「一乃木」といつた氣持であり、人を煩はしたり、仰々しいことをするのが嫌ひであつた。陣中でも道があらうが、なからうが、思ひ附放題に歩いたりせられた。あちらへ行くかと思うと、こちらであつたり。

人をもてなすことも、仰々しくしない。外國武官が旅順に來たときに、司令部では相當の御馳走をするつもりでゐたが、大將は「兵隊の食ふもので結構だ。折角從軍したのだから、兵隊と同じ生活をさせてみないと効能がない」といはれた。

人に迷惑をかけまいといふことは、しよつちゆう大將の頭にあつたことだ。世間はそれですまされないが、大將自身は「すてゝ置いてくれ、それが一番氣樂だから」といふ風であつた。世間には、率られると馬鹿に機嫌のいゝ人があるが、大將は大嫌ひであつた。内容の薄ッペラなものに限つて仰々しくされることを喜ぶものだ。

電車に乗つても、車掌の仕事をさまたげない隅つこのところに立つてゐられた。空席があつても「人に迷惑をかけるから」といつて坐られなかつた。

「乃木大將が乗つてゐる」と、いふと、あたりの人が遠慮するだらうと、——窮屈な思ひをさせたくないといふ心使ひであつた。

人の迷惑を考へてもあるが、自然人らしいところに大將を考へないと、大將を見誤ることになる。天衣無縫である。縫つてないやうで縫つてあり、多少は穴もあいてゐるし、楯で量つてあるやうで、こぼれもあるといふところに風韻がある。ギチ／＼と立つけの悪い雨戸みたいな人間は、ユトリもなければ溢みもなるものだ。

一六 この思ひ

自分のことは自分でされた。大將ほど人に面倒をかけなかつた人も珍しい。副官も、公務以外に一切厄介をかけなかつた。

最初は氣むづかしい人と思うが、慣れるとこんな仕易い人はなかつた。

副官も、縁故者から採るやうなことはしなかつた。陛下の御命令になるものに、註文するのは間違つてゐると、一度も希望をいつたことがなかつた。

副官と一しよに家に歸つても、玄關先きで「ご苦勞だつた。もういゝ」といつて歸す風だつた。

副官にでもゾンザイな口の利きやうなんかしなかつた。「かうして下さい。あゝして下さい」といはれる風であつた。

いつか、上服の釦が一つ外れてゐたのを、副官が注意したことがあつた。ところがその翌くる日、「きのふは有難う」といつて丁寧に禮をいはれた。

副官は何のことかわからなかつたが、釦のことだと聞いてビックリしたことがあつた。

若いときから苦勞せられただけに、思ひやりは深かつた。兎に角、苦勞性であつた。

旅行中でも、風呂番に背を流させられたことは一度もなかつた。

寒い満洲でも、大將の部屋には、螢火のやうな火しかないの、あるとき落合軍醫部長が「第一線の兵卒とは違ひます。一軍の司令官たる大切の閣下が、こんなことから、病氣でもされたらどうなります」と、諫めて、火をウンとつがせたが、部長がゐなくなると、火を豆のやうに小さくしてしまは

れた。

蚊が出るようになつても、大將は兵隊と同じ面帳(めんちやう)(顔だけを蔽ふ蚊帳)を被つて居られる。戦況が思はしくなかつたのも、丁度このころで、大將は面帳を被つたまゝ、壁に凭れて終夜眠らぬ日が何日もつづいた。

蚊帳がないのかといふと、管理部が持つて來た白い蚊帳が備付けてあつた。

ある日、海軍重砲隊長黒井中佐(後の大將黒井梯一郎)が大將のところへ戦況報告に行つたとき、

大將は「蚊はどうか」と訊かれたので、中佐は「ひどいので困つて居ります」といつた。

黒井中佐の土産には、チャンと、白い蚊帳が手に握られてゐた。

中佐は、その蚊帳を吊つて、士官たちと四方から首を突込んで寝た。

ところがあとで、乃木大將が蚊帳をくださったものゝ、大將自身は、面帳を被つてゐるといふことを聞いてひどく恐縮した。

中佐は、その蚊帳に「乃木大將なさけの蚊帳」と命名した。

一七 その風姿

大將は、肉つきはよくなかつたが、背は高く、五尺五寸八分あつた。體重は十四貫五百目くらゐである。

少し前かゞみで、顎を前へ突き出してゐられるのが目につく。

顎髯には最も特徴があつた。大將は日清役ころからもう白いものが餘程あつたが、日露役には（五十六歳、七歳）殆んど白髪の人であつた。それを缺で短かく刈り込んでゐた。自刃される前の日の寫眞にあるやうな、長い髯ではなかつた。

芝居や映畫では、この寫眞をモデルにしてゐるやうだが、あれは大將のふだん顔でない。

明治天皇御崩御の後は、一切髯の手入をしなかつたので、あんなにのびてゐるのである。

私が、大將を最後に見たのは、自刃される三日前、宮中殯殿の御通夜の時であつた。正装の大將が端然として御柩おんひつぎの前に首かうべを垂れてゐられた。その姿のつゞましさ、痛々しさ、自刃されたとき、大將

のその日の姿を思ひ浮べて涙を落したが、その殯殿での姿は、人違ひでないか、と思つたほど、顎髯がのびてゐた。

顎の張つてゐることも、大將の一つの特徴であつた。

大將のからだは、あれでよくやれたものと思ふほど、傷だらけ、病だらけであつた。左眼は角膜炎に故障があり、殆んど失明同様であり、右の耳は中耳炎を病まれてから（明治四十四年）あまりよく聞へない。ひどい痔疾もあつた。

齒は、四十八歳の時から大分抜け、總入齒に近かつた。

左の腕と右足首には西南役の銃創があつた。

何しろ瘦我慢の標本みたやうな人であつた。少年時代から、からだが弱かつたが、「ナニ、ヤセ蛙、押し通してみせるぞ」といふ意氣でやり遂げた。

眼の悪いことも、痔疾のことも人に話したことがなかつた。ひどいリユウマチスもあつたが、しかもツ面ツまへ一つされなかつた。

大將のからだは病と創で固めてゐたやうなものであつた。

黒い軍服のころは、桶みたやうなカン／＼した高い帽子を冠つてゐられた。正帽も、後ろを削り取

つたやうな、——西南役ころの官軍が冠つてゐたやうな、——のを冠つてゐられた。これが正式なのだが、そんな古めかしいのを冠つてゐる者はなかつた。大將はどこまでも「正式」で押し通した。聯隊長時代から、左右同形の靴を穿いてゐられた。英國皇帝の戴冠式（明治四十四年六月、六十三歳の時）でさへ、この靴で押し渡られた。

日本の下駄も、支那人の靴も左右同じだ。西洋靴は不便でいかぬといふのであつた。靴の元祖櫻組に西村勝三といふ者があつた。西村はフランス生れの和蘭人レマルシヤンといふもので、製靴術を習つた。尤も東京で一番最初に製靴術を傳へたのは、支那人のアポーといふもので、それからも習つた。

明治天皇の御靴をレマルシヤンが造つたこともあつた。西村の高弟で、櫻組の職長をつとめた伊藤金之助が乃木大將のこの珍靴を造つたのである。山縣、大山、寺内諸將軍の靴も金之助の作である。

大將は何か面白いことがあると、右手を頭にあて、笑ふ癖があつた。手拭は、白の晒木綿を切つてゐられた。

口笛が大嫌ひであつた。書生などが口笛を吹くと、叱り飛ばされたものである。時計の鎖を胸に吊したり、鉛筆や萬年筆をポケットからのぞかせてゐるのは嫌ひだつた。——これ

は何といふ風俗か知らぬが、このころは大ていの若い者がやつてゐる。大將はひどくイヤな顔をせられた。

相撲はスキばかり狙つて、コセ／＼するからといふので、好きでなかつた。堂々とブツつかつてゐるやうでも、何だかすかさうとするところがイヤであつたらしい。

撃剣は随分やられたものだ。汗のひどい時は、日本紙の反古を腹や胸に押し込んだりされた。「日本紙は重寶なもので、汗を吸ふから風を引かない」といつてゐられた。

頭痛のするときは、白い布で頭をグル／＼巻かれた。

風呂はあまり好きでなかつた。海水浴をしても、清水でからだを洗はれなかつた。

風呂嫌ひは、秋山好古大將と好一對のやうにいはれた。秋山將軍は、顔も洗はず、齒も磨かなかつた。猫のやうにチョイ／＼と水で眼を拭くだけであつた。

乃木大將も、からだをきれいにせられないので、よくボツ／＼が出来たものだつた。毎日風呂に入る人に「えらいものだなあ」などといはれた。別にえらいといふほどのこともないが。

一ヶ月に一二回しか入浴されなかつたこともあつた。それに十分洗ひもされないで手や足を拭くといふ程度だつた。

藁口を使はれないではなかつたが、よく金を状態に入れたまゝ、ポケットに入れて居られた。神社へ詣る時は、金を砂でゴシトゴすり、水でよく洗ひ、紙に包んで供へられたものである。洋行のとき、ぬれ手拭入れを買はれたが、「これは立派だ。財布にいゝ」などといつて、金を入れて居られたこともある。

一八 焚火して

大將は飯に汁粉をかけて食つたりされた。餅菓子や飯の中に交せて、茶をかけて食べられたこともある。どんな味がするものか知らないが、随分變つてゐる。茶の中へ密柑の汁を絞り込んだり、生うりに鹽をつけて食つたり、いろ／＼なことがある。食事の好き嫌ひはなかつたが、味噌汁は非常に好物だつた。湯葉、高野豆腐、椎茸、ほうれん草などをよく好かれた。「肉を食ふと人間が馬鹿になる」などと、いつてゐられた。

何でも食ふといふ主義だが、らつきようと、唐辛子は苦手だつた。

一週間澤庵がつゞいても何ともいはれなかつた。

子供(兩典氏の小さい時)が好き嫌ひをいふと、食ふまで何日でもそれを當てがはれたものである。

大將の間食といふと、焼芋、衣かつぎといつたものであつた。汁粉は大ていづし餡だつた。

祭日には葱のやうな臭氣のあるものは使はれなかつた。

五月節句には、柏餅、ちまき、三月の雛祭には、菱餅、いり豆、彼岸には團子といつたやうに、昔からの風習はチャンと守られた。名月にはスキ、團子、芋などを供へられた。

「飯のよしあしをいふものにロクなものがない」といつてゐられた。昔伏見の兵學寮時代に、炊事係をやつて、ひどくまづい飯を炊いたので罰を食つたことがある。「飯のよしあし」をいふのも、その時代のことか頭にこびりついてゐるのであらう。

同じ不出來なら、柔かい方なら、いくら柔かくてもいゝといつてゐられた。

半煮飯だらうと何だらうと、甘さうに食はれた。那須野でも、赤坂でも稗飯だつた。

ある秋の日、那須野附近で演習があつた。大將は、若い士官たちと一晚露營をした。

「閣下、辨當がございませうが、これをお上がりになつて下さう」

「さうか、それや有難い。わしも持つとるが、交換して貰はうか」

大將は腰の風呂敷から、竹皮包の辨當を出した。士官は「大將の辨當だから相當のものだらう」と思つて開けてみると、冷たい稗飯と、澤庵だけだったので、がっかりした。

大將も「こいつに、稗飯を食はしてやらう」くらゐのいたづらだつたらう。

酒は好きだつた。随分大酒を飲まれた時代もあつた。痛飲夜を徹したといふこともあつた。旅團長時代から、追々に深酒をされなくなつた。まして、日露役後は。——日露戦争の出征途中、

廣島で飲んだ「天爵」といふ酒が非常に氣に入られたやうだつた。

大將は管理部長渡邊中佐に、毎月の酒代として百圓づつ拂つてゐられた。「いくら飲まれましたも、酒代は頂きません」といつたが、「餘計に飲んではすまない。マア取つて置いてくれ」といつて、たつて渡された。大ていは人に飲まず酒だつた。

酒代に百圓も要らう筈はないが、何かの雑用にと、いふつもりでもあつた。

「あすは元日ぢや、一杯飲んで春を迎へようか」と、杯を重ねて横になると、一夜明けた明治三十四年一月一日、死力を盡して半歳の久しきを守つた旅順、——全滅々々をくり返し、五萬の死骸でこの山を埋めた旅順が遂に陥落した。

大將は「随分骨を折らせたのう」といひながら、好きな酒に舌鼓を打たれたが、胸の苦悶をどうすることも出来なかつた。黒い影が顔を包むやうになつた。

その大詰の幕は「死」より外に選ぶ道がなかつた。

ある町で、軍帽のかゝつてゐる家を見つけて、「お前の内は軍人だな。一杯飲まう」といつて、酒をおごつたこともあつた。そんな大將はもう見られなかつた。

演習で民家へ泊つても、外套をかむつて横になられたもので、家人がどんなにすゝめても蒲團を着られなかつた。疊だけ拜借するといつて、澤庵一つ口に入れられなかつた。

折角の好意だから受けてよささうなものだが、軍隊の泊つたために迷惑をかけてはいかんと、頑として軍隊の賄以外のものを受けられなかつた。

軍隊が炊事をしないで、舎主に賄はす場合でも、金不相應の御馳走は一切受けられなかつた。

陣中にあつて、いろ／＼と御馳走の品をそろへたりすることは氣に入られなかつた。どんなものでも喜んで食はれた。澤庵一切でも「御馳走」といはれた。

奥元帥もさうであつた。一切食事の小言を言はれなかつた。乃木大將と同じやうに、何日澤庵がつづいても「御馳走々々」といはれた。

大將は「なぜこんな御馳走をするのか、兵隊もこれと同じか」といつて澁い顔をされたといふ話が
残つてゐるが、さういふわけではない。兵隊の食事については、とても氣を配つて、よく炊事場へ鍋
の蓋をあけに行かれたものである。

兵隊と同じものでなければ口にしないなどといふ話があるが、さうではない、兵隊と同じなら、む
しろ喜ばれるが、折角心配して作つてくれたものを無下にはねつけたなどといふことはなかつた。

快よく箸をつけても、兵食はどうだらうかと、必ず取寄せて見られ、箸をつけてもみられたもので
ある。

二品三品と出ても、それを一皿にゴチャンと交せて食つてしまはれた。一皿づつ味つたら旨かり
さうなものだが、「腹の中へ入つてしまへば、同じだから」といつて、ゴチャンとにされてしまふ。

一皿で何でもゴチャンと煮たものでいゝのである。

自分が芋を食ふから、人も芋を食へ、といふのではない。人が芋を食はず、稗飯を食はなくても、
自分は食ふといふのであつた。

大將は、几帳面すぎるところがあつたやうでも、木や石ではない。人のことは随分大きな目で見て
居られた。曲がつたことは許されなくても、ユトリのない人間を求めよう造らうといふやうなつもり

は微塵もなかつた。コセンとしてゐる人間が一番嫌ひであつた。

自分に對しては嚴格であつても、人に對してそれを求むるつもりはなかつた。

耳を落すやうな滿洲の冬でも、あまり外套も着られず、火にもあたられなかつた。

さうかといつて、それを人に強ゆるやうなことはなかつた。陣中では、いつも參謀や副官に「寒い
から外套を着よ」「無理をしてからだをいためなよ」といつも氣をつけて居られた。

大將が寒からうと、炭を贈つた人があつた。その後、その人が大將を訪ふたとき、その炭がそのま
ま庭の隅にころがつてゐた。

奉天戦のある日、吹きさらしの野原に、大將は外套も着ないで立つてゐられた。野を渡る寒い風が
大將の顔に矢のやうに吹きつけた。雲さへ交つてゐる。

大將は石像のやうに突立つてゐられる。

軍の衛兵長建川中尉（現中將、元駐ソ大使）は支那人の家から高粱の穀を集めて来て、大將のそば
で火を焚き始めた。

「閣下、火を焚きましたから、おあたり下さい」

かういふと、大將は、――

「有難う。しかし、おしは寒くないから、お前達であたつてくれ」と、いつた切り、動かうとされなかつた。

軍司令官が火にあつたから、といつて、どうといふこともない。しかし、第一線にゐる兵士たちはこの寒さの中で戦つてゐるのであると思うと、「勞佚必ず身を以て同じくす」とある氣持が見えてゐるのである。「三略」にも「良將の軍を統ぶるや、己れを怒らして、人を治む」とある。己れ苦しんでこそ、人を服することが出来る。

折角苦心した焚火にも近寄らなかつたので、中尉は小便を引つかけて消してしまつた。

困つたの、弱つたのといふことは嘘にも出されなかつた。暑い寒いといふことすら口から出なかつた。夏になれば暑いに極つて居り、冬になれば寒い。それに暑い寒いといふ必要はない。——大將は一生これで通したのであつた。

ある人が、「陣中では随分御不自由でしたらう」といつたところが、「イヤ、何、だれも同じことです。第一軍人には不自由は付きものですから」といつてすましてゐられた。

一九 乃木式

「乃木式」といつていふか、とに角、ある「式」なるものが、大將の上に見られる。

その「乃木式」とはどういふ式なのだらう。

自然人らしいといふか。

強いやうで、存外弱いところもある、といふか。

粗朴で、野人で、モノにこだわらないともいふか。

ヒョッキンな點も多分にあるやうで、一面憂鬱なところもあるといへようか。

そのいづれでもが、「乃木式」はどこまでも胡粉やペンキの塗つてない、ウブのままの姿である。

とに角、何かしら一風「乃木式」なるものがあるところを見ると、「一風變つた人」といつた風にも取られないこともない。「何かしらクセのある人」といふやうに考へられないこともない。

「風變り」か「クセ」か知らないが、さういへばさうにも取られさうだ。——といつて奇人とか變人

とかいふ部類には入らない。

「普通」ではあるが、まわりの人が「普通」でないだけだ、ともいへる變り方である。

非常なハイカラだったところもあり、——シヤレたところもありながら、又、大蠻カラなところもある。

大將の赤坂の家だつて、あれが聯隊長（歩兵第一聯隊長）ころに建てた家にしては、とても文化式である。たとひ兵隊屋敷然としてゐても、とも角洋館である。地下室もある。（地面を低く堀り下げて、そこに内玄関を造つた）マントル・ピースさへある。

今日だつたら、あんな家は別に珍しくはないが、明治十三年の家としてはとてもハイカラである。だが、そこに住まつてゐる人といへば、凡そ蠻カラの標本みたいな大將だつたのだからして變つてゐる。

始めはハイカラで、終りが蠻カラになつたとも見えないではない。尤も、大將の若い頃に手套だつて、キチャンと手に合せたのをはめ、煙草を「朝日」と決めたのは、ズツと後のことで、佐官ころは、随分上等の煙草を喫つてゐられたものである。それでこそいふのだと思ふ。

といつて、キタナイ着物を着て歩いたり、そんなことは一切なかつた。講釋師が、よく「乃木大將

と熊さん」とか、何とかいふのをやるが、その中に現はれて來る大將みたやうな「キタナイ爺さん」ではない。

「ある田舎の茶店に、キタナイ着物を着た爺さんが、たづねて來て、一寸おたづねしますが、この邊に××といふ家がありますかな、といつたので、茶店の婆さんは、その家は、ツイこの先だよ、といふと、そりや有難い、その息子は戦死したといふがさうですか、——したともく。旅順で戦死しただよ。乃木のために殺されたといつて、家内ぢゆう乃木を怨んでゐるだよ、とヅケ／＼といつたので、爺さんは、さうですか、そりや一つ佛を拜まして貰ひませう、有難うございました、といつて立去つたが、そのキタナイ爺さんが乃木大將だつたといふことを知つて、茶店の婆さんは腰を抜かさんばかりに驚いた」

といつたやうな講談があるが、そんなキタナイ風をしてゐる大將ではなかつた。

いつもキレイサツパリとしてゐた。那須野にゐるときでも、野良着でさへ洗濯仕立のやうな風であつた。そこに、静子夫人の心づかひも見えるのであるが、どことなく洒落れたところがあつた。

ジジムサイところが「乃木式」のやうに考へてゐる人もないではなからうが、さうでなかつた。乃木式はどこまでも、單にして直なるところにあつた。邊幅を飾らざること、大將ほどの人は見られな

いかも知れない。

子供っぽい大人、——といふこともいへる。そこが、人から愛せらるゝ所以でもあらうと思ふ。大將となつても、少尉くらゐ、イヤ、もつと若い小さいときの乃木そのままであつたと思ふ。人間は地位を得ると、何だか高慢チキになり、人の頭を壓へてみたがるものだが、大將に限つて、少しもそれがなかつた。

子供っぽいといへば思ひ出すことがある。

ある年、ある學校の卒業式に 明治天皇が御臨幸になつた。

玄關前で諸星が居並んでお待申上てゐるときであつた。列中の大將が、ヒョコ／＼と寺内元帥の前へ行つて、擧手の敬禮をして、「これでいゝですか」と、いひながら、帽子のゆがみを直したり、服の皺をのばしたり、丁度兵隊でもするやうに、如何にもヒョウキンに子供らしく見えたので、奥、長谷川などといふ元帥たちも、吹き出して笑つたことがある。

陸軍大將といふ風でなかつた。一兵士とでもいふ恰好だつたので、一同が笑つたのである。

少しもワザとらしくないのだが、人から見ると、可笑しく見えた。

氣取るの何のといふ風はみぢんも見えないところに大將があつたのである。

その日、大將は門まで人力車で來られた。黒い墓口から車代を拂つてサッサと入つて來られた。

そのころでも、人力車に乗る大將は、先づ珍しい方だつた。馬車か自動車だつたが、大將は人力車だつた。

車夫に金をつまみ出して拂つた恰好からして、至つて慇懃だつた。「ご苦勞々々」といつて、手をあげて敬禮された。

大將は、休憩室へとほるなり、金を出して、小使に「朝日」を買つて來てくれまいか、といはれた。休憩室には、「敷島」も、舶來の兩切りも出してあつたが、大將は「朝日」と決めてゐるので、小使にたのまれたのである。

出てゐるものを吸へばよさうなものだが、自分で決めたことを崩したくなかつた。

小使はめつちだが、ヒョウキンな親爺で、「朝日なら私が持つてゐます。これでよろしければおのみ下さい」といつて、かくしから皺のよつた「朝日」の袋、一五六本薙刀みたいになつて入つてゐる袋を黒い手で突き出した。

大將は、小使の無雑作な態度が氣に入つたと見え、ニコ／＼しながら、「さうか、すまんが一本貰はうか」といつて、つまみ出した。

「有難うございます」

九八

小使がかういつて頭を下げた。貰つて貰つて有難い、といつてゐるのであつた。めつかちの小使は、昔、上野の戦争に引き出されたことがあり、出たものゝ戦争が恐ろしくて、遁げ出し、護國寺で衣を借りて諸國を歩いたといふ變り者であつた。娘を藝者に賣つて、ヤツと口すぎを立てゝゐた。子供が多いので、小使の給料だけではやつて行けなかつた。

大將が、煙草を吸ふ恰好が面白い。一口々々煙草の先を見つめながら、煙管で吸ふやうに、口をトンがらかしながら、吸ふては出し、出しては吸ふ。それが如何さまヒョコ／＼としたところがあつたものだ。

大將は、チョイ／＼一筆かきの繪をかゝれたものだが、達磨の頭に彌次郎兵衛が立つてゐるのがあつたり、洒脱なところが見えて面白い。

俄雨のときなど、通りがかりの家の干物を取り入れたり、子供の風が、電信にひつか／＼つたの見て長い竿を持つて來て取つてやつたり、陸軍大將らしく構へないところに、乃木さんの面目があつた。ひどく涙もろいところがあつたりながら、軽い氣分でまぎらす、といつた見方もあるが、さうとも取れよう。

日露役後、飛驒高山から、山中七里を人力車で抜け、岐阜に出て、そこから汽車で名古屋へ出られた。第九師團（旅順攻圍軍の一師團）下の遺族をたづねて行かれたのであつた。

名古屋驛へ著くと、窓を開けて、大きな聲で赤帽を呼んだ。

「オーイ、赤帽々々！」といふなり、「赤帽が赤帽を呼んどる」と、笑ひながら言はれた。

そのころ、將官は赤帽だつたので、「赤帽が赤帽を呼んどる」といはれたのである。

かうしたウィットに富んだところが多分にあつた。

大將の詩や歌は一面至つて肅然たるところがあるが、随分ヒョキンな歌などもある。

世の中になすべきことも多かるに、こんなところで何をなすのか。——（那須野に農人生活をなせるとき）

追ふ者も、追はるゝ者も、今や早、腹もへつたり、ねむたくもあり。——（奉天會戦のとき）

宇都宮地方で、大演習のあつた時、乃木さんは軍事參議官として陪觀に行かれた。

そのある日、寺内元帥が宿へ訪ねて來た。丁度そのとき大將は副官と食事中であつたが、寺内さんが見えたといふので、副官が玄關へ迎へに行き、元帥を案内して來ると、今まであつた膳がいつの間にならなくなつてゐて、座敷がキレイに片づけてあり、坐蒲團も敷直してあつたので副官も驚いた。

九九

副官が支關へ行つた間に、大將大急ぎで隣りの部屋へ片づけたのであつた。軍人としては大將であつても、人間としては一乃木であるから、つまらぬことに威張つてみるやうなことは露ほどもなかつた。

大將はウブの人間そのまゝを生かして行くのであつた。

その飾らざるところに、ワザとらしくないところに、大將が光つて見えた。

一〇 陣にある思ひ

大將が軍服で押し通すようになったのは、明治二十年ドイツから歸つてからである。

札入は手拭袋が代用したり、——雨にぬれても大丈夫だといふのである、——齒磨粉を使はず、焼鹽ですましたり、(英國へ行くときも焼鹽であつた)、かういふ生活振りもドイツから歸つてからであるようだ。

「歸朝してから急に固くなつた」といはれたが、特別に固くしたのではなく、それでいゝのだと思は

れたのであつた。

「ズボンを書いて寝るとよく眠れる」などといつてゐられた。

仙臺に師團長として行つたとき、大倉組の大番頭の家を借りた。家賃が五圓であつた。

「どう直されてもよろしうございます」といつたので、蓆を買はせて、支關から座敷まで一つばいに敷きつめて、靴で上がれるやうにしたので、その家でもビックリしてしまつた。

それを見かねて、家賃は五圓でも、大將の思ひ通りに直して住み易くした。

N中將が高田の師團長だつたころ、大將は出張して官舎に泊られた。そのとき、N中將は白羽二重の夜具を出した。

大將は「立派な夜具は有難いが、わしの體には虱がわいてゐるから、別のを出してくれ」といつてどうしてもそれを着られなかつた。

高田のN中將の官舎といふのは頗る立派で、N中將の好みで出来たといふ話である。

N中將の次ぎに行つたのが、秋山好古大將で、ビールに浮いてゐる蠅まで飲み込んだといふ野人だから、この官舎を見て驚いた。

その立派な官舎に、秋山大將と好一對みたやうな野人乃木が泊つたのだから、とても白羽二重の夜

具を着るどころでなかつた。

そのとき大將はこんなこともいはれた。「どうも蒲團がいゝと寝付が悪くていかん」と。

どこまでも質素であつても、キタナイ風なんかしない。世間にはキレイな衣裳を着けてゐる人が存外、身仕舞のキタナイ人があるものだが、大將はモンペイをはいてゐても、サッパリとした、洗濯のしてあるのを着てゐられた。

陣中でも大將は肋骨つきの服にチャンと勳章をつけてゐられた。日露戦争には「戦時服」なるものが出来て胸に六つの銀釦があり、袖にも星の章しほしがついてゐた。この服は、大本營から戦地へ出張した山縣元帥さへ着てゐられた。大將もこの服を着られないではなかつたが大抵の場合肋骨服であつた。

第九師團長大島久直中將は、乃木大將と同じやうに肋骨服を着て、漬縮緬の帯を締め込み、朱鞘の刀を佩びてゐた。西南戦争の繪に出て来るやうな出立ちであつた。

戦争途中に服装が改正になり、カーキ服に肩章（最近までなじみの服であつたもの）となつたが、大將はもとの通り黒の肋骨であつた。尤も將官は、昔のまゝでよかつたのであるが。

一一 南に使用して

臺灣の蕃人が父と仰いてゐた乃木大將が、臺灣總督となつたのは當然来るものが來たのである。明治二十九年十月であつた。

前任者は桂太郎である。

大將の母堂壽子むぢうは七十の頃に達してゐたが、母堂は「大將の行くところへは、いづれへでも行く」といはれたので、大將も喜んで母堂と共に渡臺された。

臺灣は平和に還つたとはいへ、頻々と土匪の出沒もあり、被害も多かつた。

大將は總督であつても、夜中歩哨線を巡視したり、軍人としてのつとめは片時も忘れられなかつた。全く陣中にあると同様であつた。

官邸は劉永福の邸であつた。

副官は、少佐小畑蕃、秘書官は男爵大島藤太郎（大島圭介の長男）私設秘書として富永鑄太郎とい

ふ人がゐた。

母堂はマラリアに罹られ、十二月二十七日、官邸で亡くなられた。六十九歳であつた。大將は母堂の亡骸を、臺灣に埋めることとした。又これが母堂の希ひでもあつた。臺北三板橋の日本人墓地に土葬した。

長女恒子は熊本在任中に死んだが、その墓も花岡山に設けた。母堂を臺灣の土に埋めることについては、賛成しない人もあつたが、やはり「死んだところ」に墓を建てた。

大將は母堂が亡くなられてからは、毎朝五時に起きて、富永氏を連れて、臺北の官舎から半里も離れた三板橋の墓所へ詣りに行かれた。富永氏も毎日のことなので、時々足を痛めてビッコを引き、あとに尾いて行つた。並んで歩きながら、「そちはわしと同じ高さだのう」などといはれた。

富永氏は今も至つて健やかである。不思議といふべきか、富永氏は、大將生寫しである。顔形も、猫脊のところ、顎の具合、眼元、——大將そのまゝである。現世に於て大將の面影を偲ばんとてならば、富永氏を見るべしである。

大將が臺灣を引上げるとき、富永氏に「お前は残つてくれんか」といはれ、富永氏も別に内地へ歸らなければならぬ用もなかつたので、大將の世話で臺灣銀行に勤めることになつた。

民政長官水野道氏に一千圓の金を托して、その利子で祭りをしてくれといはれた。

その後、故能久親王の御祭典があつた時、北白川宮殿下のお伴をして渡臺された。一日母堂の墓所で丁寧なお祭りを行はれた。大將の目は涙でぬれた。

紅頭嶼(東南海上)の巡視に行かれたとき、マラリヤに罹つた。臺北に歸つてからひどく悪くなり、一時はどうかと思はれた。軍醫部長は藤田嗣章(藤田嗣治畫伯の殿父)であつて、非常に力を入れたので、次第に下り坂に向つた。

「そちに頼みがあるがの」

富永氏は、

「何でござります？」

「牛乳の中へソツとウキスキーを入れてくれんか」

「そりやいけません」

「盃に半分でいゝから」

「軍醫部長にたづねて見まして」

「そりやいかん。軍醫部長にも、秘書にも内證にの。ハハハハ」

「ハハハハ」

富永氏が、内證に少し入れると、大將は瓶をつかんで、トク／＼とつき込んだ。

「そりやいけません」

「マア、いゝよ。これでよくなるよ」

總督時代でも一汁一菜であつた。酒はコップでグーとやつた。尤も一杯だつたが。

客を招く時は、その席次がやかましかつた。名札は自分で書いた。自分は一汁一菜でも、客には御馳走をしたものである。

靜子夫人は大將の母堂と共に、日本間に居られた。日本間は二階に三間あり、下にも三間あつた。

終日森閑としてゐた。

モリソン山を新高山と稱するに至つたのも大將の時代で、皇后陛下の御沙汰であつた。

總督時代は大體二年であつた。母堂の遺骸を内地へ移したら、といふ意見もあつたが、大將は一般の日本人同様、新領土に眠ることが母の志であるとして、そのまゝとなつた。

富永氏は、日露戦争が起きると、留守宅見舞のため、二週間の休暇を貰つて上京した。

夫人は非常に喜ばれ、序でに戦地へ渡つて大將を訪ねてもらひたいといはれた。

富永氏は、もと／＼乃木家の執事役であつたし、戦地へ行くことなら、願つてもないことなので、銀行の方へは辭職の電報を打つた。

銀行からも許可があつたので、陸軍の軍屬といふ資格で出發した。

夫人から梨を五十個、富永氏に托された。夏だつたから、途中梨は腐つてしまつて、僅か十五個しか残らなかつた。途中食つたと思はれてはいかぬと思つて、腐つたまゝで別にさげて持つて行つた。

柳樹房（やなぎじゆぼう）の軍司令部へ行つたら大將は高崎山（高崎第十五聯隊苦戦の所）へ行つてゐられた。電話で來たことを通すると、大將からすぐ來いといはれたので五六里もある道をもと思つたが、留守宅の御様子をお聞せたいし、この上折角の梨子が腐つてもいかぬと思つたので、疲れてはゐたが、高崎山へ出向いて行つた。

山へ行くと、大將は非常に喜ばれた。そして、富永氏を觀測臺へ連れて行つて、敵の陣地をのぞかせたりした。

梨は幕僚に分けてやられた。戦地には甘いゝ梨があつたので、富永氏も少々ガツカリしたが、夫人の志に幕僚一同うれしく涙にくれ、久しぶりに故國の梨を食ひながら、富永氏を中心に、内地の様子などをむさぼるやうに聞いた。

一一一 老寒生

讃岐は金倉寺に一人の老人が下宿を求めて来た。

「どうも、この寺では御取持が出来ませぬから」といつて辭つたが、是非にといふので、荷物を下ろした。

それが乃木大將であつた。第十一師團長としてこの地に來られたのである。

この寺は、大將を記念する名所となつて居り、大將の部屋を見物に來る人が年々多くなるといふ盛況である。

金倉寺は四國第七十六番の寺である。師團司令部は普通寺にある。寺から西南二十五町である。

大將は寺にゐるといつても、佛門に縁のある人ではない。寧ろ佛臭いのは嫌ひであつた。いはゞ、寺を獨住ひの宿に使つたといふに過ぎなかつた。

戰地へ釋宗演師が來たときも、たゞハハといつてゐるだけで、深く話をしようとしなかつた。

「坊主は出かけて行つて説教などをするものではない。こちらから行つて道を聽くべきものだ。このごろの坊主は説教を賣りに行く」といはれたことがある。

大將は金倉寺を下宿として借りてゐたゞけである。しかし、寺のことだから、夫人を呼び寄せたりはしなかつた。訪ねて來た夫人を玄關から追ひ歸したくらゐである。いこちなところもあるが、「寺」を「家」と一しよに考へたくなかつた。寺はどこまでも寺、家は家であつた。下宿はしてゐても、家でなく寺であるといふことだけは嚴重に守つてゐた。——これを混同する坊さんの多いことかな、と申したい。

寺では、よく住職（俊良師）と一しよに飯を食つた。寺のまづい味噌汁を吸ひながら、住職と差向ひで盃を傾け、夜を更かしたこともあつた。

寺では心配したほどのこともなく、大將の食事は、至つて手輕だつたので、住職も何も構はんで置いた。

別に御馳走をするやうなこともなかつた。こんな人なら何でもないと思ふやうになつた。別に寺でも師團長といふやうなつもりもなくなり、下宿人、——寺の一人といふやうな氣持になつた。

豆腐汁、大根の煮付といつたものだが、それを旨さうに食つた。

大將の部屋は奥の三間で、十五疊を客間に、十疊を寢室に當てゝゐた。既に納屋を使った。朝早くから馬を野外に驅られた、これが日課となつてゐた。雨が降つてもかまはず飛び出すことさへあつた。

野良に働く人達に、畑物のことなどをよく訊ねられた。那須野で畑仕事をするだけあつて、人一倍興味を持つてゐられた。

行きずりの人にも、畑に立つ人にも「御苦勞々々」といはれた。

「乃木さまが見えた」といつて、わざ／＼道ばたに出て、挨拶をする百姓もあつた。

畑物については、百姓がビククリするほどよく知つてゐられた。

司令部へは、いつも一番乗であつた。——時間よりも早く出られるので、まだ掃除も出來ず、火鉢に火も入れてない内に來られるので、困つたのは小使である。

大將は、そんなことに肩托はないのだが、小使たちになつてみると身を切られる思ひである。

小使もよく／＼困つたと見え、副官に「もう少し遅く御出勤になるやうに申上げて頂きたい」と申した。

これには副官も同意である。どうも少し早すぎるので、自分達も弱つてゐた矢先だつた。

大將にいふと、「さうかく、それならあすから、もつと遅く出やう」

その翌くる日から、遅く出られるかと思ふと、小使たちがセッセとやつてゐるところへ、大將がト／＼と門を入つて來られた。

小使たち「一向に利き目がないな」と思つてゐると、大將は部屋へは入らないで、建物の廻りを馬でクル／＼廻つてゐるのである。そして掃除の出來た頃を見計つて入て來られる。

部屋へ入らないだけのことである。

少し早すぎると練兵場へ行つて、一わたり馬に汗をかかせたり、——出勤が、遅くなつたワケではない。

隊が演習してゐるところへはしよつちゆう額を出された。毎日のやうにやつて來られるので弱つてゐた。

師團長室に、立派な絨氈が敷いてあつたが、それをめくれといはれた。副官が「これは規則でさうなつて居ります」といふと、「規則なら致方ない」といはれた。

善通寺に師團が出來たのは明治三十一年十一月で、大將が第一代の師團長だつた。四國に始めて師團が出來たのだから、師團長を歓迎するため町でも大變な仕度をしてゐた。

しかし、大將は一個の軍人といふ氣持で、無雜作に乗込み、多度津の花菱旅館に一泊してから、翌日はヒョコ／＼と師團へ乗込まれた。

どこへ行つてもさうであつた。歓迎などといふことは大嫌ひだつた。豫報なしに宿へ入り、あとで大將だとわかつて、町で騒いだことも度々あつた。

管下の巡視は必ず馬であつた。自分も行軍してゐるつもりで、どんな長い道でも車に乗られなかつた。ひどい痔病がありながら、オクビにも出されず、雨が降らうと平氣で馬旅行をつゞけられた。

ある日、草鞋をはいて歩いてゐる學生があつたので、わけを聞くと、毎日四里からの道を通學するのですといつたので、非常に感ぜられ、學生の名前を聞いて手帳に書きとめられた。

日を改めて、學校へその學生の成績を問合されたところが、優等生だといふことがわかつた。その後、學生は士官學校に入り、士官になつたといふことである。

三十二年の正月、新年會を象頭山（金毘羅山、七百メートル）で開いた。

琴平停車場へ集合すると、競走で山登りといふ命令である。奥の院から上は道もないので、中には長靴を背負つて登つたものもあつた。

師團長は、若い將校に交つて、いつも先頭で登つた。その時五十一歳だつたが、「ナニ、若い奴に

負けるか」と弱つた顔なんか見せられなかつた。

山の上で「オイ、こゝで分列式をやらう」といひ出された。工兵の士官候補生が指揮官となり、大將も整列して足をバタ／＼させながら歩いた。

新年會といつたところで、めい／＼手辨當に、キャンピン一本といふ式、——大將は、食つた辨當の竹皮をクル／＼と巻いてカバンに入れて持つて歸られた。

善通寺の下宿時代には餘程澤山の書籍に目を通されたやうだ。詩作に耽られた日も多かつた。

碁も随分やられたが、相手は住職や副官で、いゝ碁相手であつた。まだ副官の方が二目くらゐ強かつた。

村の巡查で同郷者があつたが、この巡查とはよく碁をやられた。とき／＼二人で「待つた」「待たん」で争つたこともある。

「君が、泥棒と組み合ひの最中、繩を忘れたから待つてくれなどといふかい」

「そんなこと」

「さうぢやらう。生きるか死ぬるかといふ場合、待つたも絲瓜もあつたものぢやない」

「戦争と違ひます」

「碁を打つても戦争と思はんけりやいかん。ハハハハ」
「ハハハハ」

その碁盤は今も寺にある。

大將の記念品として寺に残されてあるものは、白木の長持一掉、砥部焼小火鉢四個（砥部は伊豫の砥部村で造る白磁の陶器である）竹の臺のランプ一對、彩色山水瀬戸中皿十三枚、陶器火鉢一個、硝子盃六個、古軍帽一個、延寶版宇津保物語三十冊、明治三十二年職員録である。

寺には「鶏足山」と書いた額を残されてある、額の長さ一間、一字の大き一尺五寸といふ大文字である。

大將の居間は、相當に立派な部屋で、龍の天井繪があり、襖には猛虎の圖がある。何人の筆かは知らない。

「明治三十一年除夜の止筆」として、

おしからぬ身にも病のなかれかし、よみ路の旅は特に健康ヲ要スレバナリ。——といふ、片假名交りの珍歌？ が寺に残されてある。冥土の旅も、特に健康を要すの一語甚だ奇抜である。

庭には「妻返しの松」などと相當の宣傳ものがある。見物人の來る筈である。

大將は、普通寺の師團長時代、北清事變があり、そのとき部下の分捕事件（嫌疑であつたが）が起つたので、責を引いて那須野に隠れられたが二十五年四十四歳のときも休職となり那須野に去つた。三十七年第三軍司令官としてクローズアップするまで那須野で茄子や胡瓜を造つてゐられた「こんなところでなにをなすのか」——大將に取つては一日もジツとしてゐられない氣持であつたらう。

一三三 威と恩と

ある朝だつた。大將が馬をこなししてゐるところへ、一人の士官が通りかゝつた。

「オー」と、大將が聲をかけられた。

士官は、少し隊へ出るのが遅れてゐたと見え、ハツと胸にこたへた。

かういふ場合、よく體裁を繕ひたいものである。悪意でもなんでもないのであるが、「寢坊をしとりまして」「ゆうべ飲み過ぎたものですから」などとはいへないものである。

大將は、別に士官をとがめるつもりでも何でもなかつたが、士官は一寸言ひわけをしなければいけないやうに思つたと見え、「ハ、一寸演習を見に行つとりまして」といつた。

これなら師團長の手前大變立派である。

一寸したことなのだが、さう言つてみたいものなのである。

すると大將、何といふかと思つと、――

「さうか、そりやいゝ、演習を、それにしちや靴が大層きれいだな」といひすて、馬を走らせた。

士官靴を見ると、なるほどピカ／＼に光つてゐる。これでは演習に行つたとは受取れない。

士官は頭をかきながら、大將の後ろを見送つた。

大將には、かういつた軽い皮肉があつた。

口から出ることが、少しもワザとらしくない。一寸うまい皮肉も飛び出す。シヤレも出るといつたところがあつた。

大將にはウツはいへなかつた。だれだつてウツをいつて氣持のいゝ筈はないのだが、大將に向ふとその「眞」に打たれるのか、一切が裸のまま、向ふ氣持になる。

ウツといふものでなく、勘違ひしてゐたといふことはいくらもある。

それでも、あとで「ア、ウツを言つた」と思つて、すまない氣がするものだが、大將に間違つたウツをいつて、夜も眠られないほど惱んだ人もある。それだけ大將が「眞」の人であつた。

大將が隊へ来て、ある中隊長に「先月は何度行軍をしたか」とたづねた。すると中隊長は、言下に「三回行ひました」と答へた。

大將は、それで満足出来なかつたと見え、すぐ兵隊に、「先月お前は何回行軍に行つたか」とたづねられた。

兵隊は「三度行きました」といへば、何でもなしのことなのだが、その兵隊は二度しか行かなかつたと見え、正直に「二度行きました」と答へた。

中隊長は三度といひ、兵隊は二度といふ。これでは、どちらがどうかかわからぬが、大將は、どちらがどうかとはいはない。たゞ問ふてみたゞけである。

どちらもホントウなのであらう。三度行軍をやつたことに間違ひないが、その兵隊は、何かのことで、――病氣か、他の勤務かで行かなかつたのである。

これでいゝのである。三度も二度もウツではないのであるが、何となく、ピンと來るところがあるやうに思はれる。

大將はよく、兵隊にデカにモノをいふ風があつた。兵隊をつかまへて、何だとか、かんだとか言はれるので、「あれはよされたら」といつた人があつたが、「人が川の中で溺れてゐるのを、見す／＼捨て置くものがあるか」といはれた。

大將の方では、人傳てゝは安心して居られない心持があつたわけではない。別に人を待つほどのこともないことだからといふ考へであつた。師團長がデカに兵隊にモノをいふやうなことは昔はあまりなかつたことだつた。何か注意することがあれば順を追ふてするのが普通であつたが、大將はさうでなかつた。こゝにも「乃木式」らしいところがよく見えてゐる。

乃木大將の秘書だつた富永氏が、いつか絹着物を着てゐたのを見て、——それも、秘書をやめて何年も経つてゐたのだが、——「そちは、大へん立派な着物を着てゐるぢやないか」といはれた。

乃木家にゐるときは、木綿羽織、木綿袴で通してゐたのに、と思ふと恥しくなつた。

「乃木家の家風」をいつまでも富永氏に押しつけるにも及ばないのであつたらうが、「あの時はあの時、今はどうでもいゝのだ」となつては、折角乃木のもとにゐたことが、なんにもならない。

「これは、ある人の結婚の媒介かひやくをしましたので、禮に貰つたのでございますものですから」

「貰つても、着ない方がよい。乃木家の家風に背くでないか」

「ハイ。わかりました」

話しはこれだけだつたが、富永氏も頭をかいた。

自分の手から離れた人のことなり、どうでもいゝやうなもの、やはり溺れるものをすて、置けなゝ氣持であつた。

ある年のこと、牛込のある学校の校長T大佐が、大將に額面を依頼したところ、「それを何にするのか。生徒に悪い見のものでもゐるのか」といはれた。

校長は「別に今、不心得のものがあるといふわけではありませんが、日常生徒に閣下の御高德を仰がせたいと思ひまして」といふと、「それなら、俺わしの字なんか何にもならん。悪いことをするものがあつたら連れて来い。言ひ聞かせてやるから」といはれたので、校長も二の句がつけず、引退つて来たことがある。

演習でも、戦場でも、會ふ者ごとによく聲をかけられた。

「飯を食つたか」といふことが口ぐせのやうに出たものである。

だれとでも楽しみ、だれとでも苦しむといふ風であつた。一段高いところに坐つてゐるといふやうな氣持は少しも見られなかつた。

それほど、心やさしい大將だが、大將の前へ出ると、何となく気がつまつて、モノもロク／＼いへないやうなことも随分あつた。威に打たれるといふのであらう。

臺灣總督時代（第十一師團長となる以前）に、ある事件が起きて、新聞記者が大將に面會を申込んだことがあつた。新聞記者の先達となつて押かけたものは鈴木某といふ、斯界の猛者であつたが、つ乃木に會つて意見を聞かう」といふ勢ひ、大將も會はうといはれるので、官邸では非常に心配して何事が起きるかも知れんと、憲兵や、守衛で固めてゐた。

さて、いよ／＼鈴木一黨が乗り込んで来て、應接間へ通された。

そこへ、大將が出て来た。

「さあ、おかけなさい」と、記者連にいふと、鈴木は「閣下からおかけ下さい」といつて立つたまゝでゐる。

「お客の方からかけて下さい」

「閣下から」

「おかけなさい」

「閣下から。これではお話が出来ませんから」

「おかけなさい」

「閣下から」

いつまで経つても果てしがない。とう／＼「おかけなさい」「閣下から」で押し通し、話も何もしないで、歸つて行つた。

如何に何でも、大將より先に腰を下るすことも出来なかつたらうし、威風に打たれたと見え、厚かましくやることも出来なかつたやうだ。

その記者のひとり、乃木さんに會つて、一つ大に總督の意見を質さうと思つたが、會つてみると何もいへなかつた」といつてゐた。

多分に近づき難いところがあつたやうだが、事實はさうでなかつた。朝から晩まで軍服を着てゐるので、何となく會つて窮屈なところもあつたであらうが、二度三度と會つてみれば、こんな親切なよお希さんはないのである。

大將が師と仰ぐ山鹿素行が、「威儀嚴重ナラザレバ人之ヲ侮リ蔑ロニシテ、法令オロソカニ下知整フベカラズ。古今ニ例多シ。但シ、作リテ人ニ恐レシムルニ非ラズ。大將心ニ眞實深キ時ハ、自然ニ威嚴備ハルベシ。威嚴全キ時ハ、兵其下知ヲ重ンジ、進退共ニ節ニ應ジ、其利全カルベシ。是ヲ將ノ

威ト云フナリ」といつてゐる。

大將はその標本であつた。「眞實」なるが故に威嚴が備はつてゐた。

二四 新を趁ふて

大將は、なか／＼新しがりやでもある。舊は舊とし、新は新として、その發達を助けた。

マラソン競走などといふことでもなか／＼興味を持たれた。二本足で走ることなら何でもいゝといふわけではない。それ／＼に工夫してこそ走つても面白い、といはれたものだ。しかし「裸に近い車夫や馬丁のやうな風をしてやるのは賛成しない。人間が裸で通せるものならいいが、さうは行くまい。裸で戦争も出来ぬ。あたりまへの風をして競走したらよささうなものだ」といはれた。軍装でもして走るといゝ、といつたつもりでもあつたらう。

明治四十四年の二月だつたか。越後の高田で、初めてスキー倶楽部が出来、招かれて行かれた。長岡外史中將が師團長のところである。こゝでは蔣介石も留學生として、雪に埋れながらお一二をや

つてゐたのである。

明治四十三年の冬、瑞典式のスキーが陸軍省から見本としてこの師團へ渡された。船型をした木ギレで雪の上をすべらうといふのだから、中には「こんなもので」と思つてゐるものもあつた。

翌年の一月、折よく塊太利のレルヒ少佐が、高田聯隊附として來た。少佐は此道の達人だといふので、本腰を入れて研究することゝなつた。その翌年には、早やスキー倶楽部が出来、二月十日その發會式を行ふことゝなつた。

乃木大將が見えるといふので着時間をしらべたが、わからない。小諸驛で見たといふものもあり、大將のことだから、いつ何時とヨッコリ來るかもわからない。出迎へに行かなくても——行かない方がいゝくらゐの大將である。

師團長官舎の玄関に立つた大將は、師團長に「やあ暫く、大變な雪だな。始めて櫓に乗つたが、結構なものだな」といはれた。

「もつと結構なものを御覽に入れますよ。ハハハ」

「スキーといふものを見に來たが、どうかな。櫓みたやうなものかな」

「櫓々、さうです。足の櫓でございます」

「フム、そりや一つ見たいものぢや」

十一日、紀元節日和で、スキーに持つて來いの天氣である。地は一面の白布を布いてゐる。薬師山のスロープを登るとき、大將は足をすべらせて、ステンコロリと見事な白達磨となつた。

「それだからこそ、スキーが必要なのでございますよ。ハハハ」

長岡中將、長い髯をひねりくゞ得意げに笑つた。

「なるほど」

起き上がりながら感心してござる。

晩餐會の席で大將は、――

「このやうに萬の利益あつて、一の弊害もない利器が、今日始めて輸入されたことは、如何にも不思議で、西洋文明吸收の落度である。これによつて見ても、まだ澤山よいものが輸入洩れになつてゐることゝ思ふ」

といふ話をされた。大將が「新」に對して、こんなに寛大であり、興味深く感じてゐられた。

このとき大將は、紙入れから札を出して「これは少しだが、スキー倶樂部のために」といつて差出された。

數へてみると、十圓札が十一枚あつた。

「百十圓ございます」

「さうか」

といつたが、札の勘定違ひで、百圓のつもりだつたであらう。

このとき長岡中將のあとにつゞいて櫓に乗つてゐる寫眞が今に残つてゐる。

海外事情については特によく知つて居られたし、知らんことを力めて居られた。新しい海外書は、むさぼるやうに讀まれた。

英國から歸られたときの土産は、一樣に世界地圖であつた。

陸軍の服装についても、大將は帽子を問題にしてないのはいけない、こゝへ階級なり、兵種なりをわかるやうにし、しをつけたらいいといふ意見だつた。

二五 愛のたづな

馬は好きであり、可愛がられた。「軍人としてのたしなみ」といふ點も多分にあつた。軍職を退いても馬だけは離されなかつた。佐野源左衛門のやうであつたらう。「いつ戰場に立たなければならぬかもわからぬから」——これが大將の氣持であり、出陣準備であつた。

學習院長になる前だつたか、休職になる噂があつたとき、某中將が「閣下の御乗馬をお譲り下さいませまいか」といつたら、「たとひ、どうなつても、馬は軍人の武器だから」といつて、ことわられたことがある。

馬は劍と同一に思つて居られた。

ある日、H大佐が大將を訪ねた。すると、大將は「馬を厩に繋いで上げよう」といつたので、大佐は面喰つた。實は車で来て、門前から歸してしまつたのである。

大佐は苦しまぎれに、「けふは歩いて來ましたので」といつたので、大將は「さうか」といつたとき、何もいはれなかつたが、大佐は脊に汗をビッシヨリかいた。歩いて來たのは門から玄關まで、僅か十歩の間であつた。

日露戦争後、凱旋行軍が行はれた。東京の目抜きを各軍司令官はじめ部隊が行進したのであつた。各軍司令官は、馬車に乗つて行列の中に入つたが、ひと乃木大將だけは騎馬であつた。馬車に乗

ることをすゝめたが、聞かれなかつた。「馬にも凱旋の喜びを頒けてやりたいからかう」といはれた。

鳥取縣東伯郡以西村佐伯友文氏の家は大將夫妻が訪れた。明治四十一年のある日であつた。

大將は茶をすゝりながら、佐伯氏に馬のその後の様子を訊かれた。

佐伯氏は、馬は至つて達者で、たくさんの仔を生んだことなどを話した。

大將はそれを聽いて非常に喜ばれた。

しばらくして、大將は佐伯氏に案内されて、厩へ行かれた。

そこには白い馬が長い睫毛をしばたきながら、四つの脚を行儀よくそろへて立つてゐた。

それは、大將が旅順でステッセルから贈られた馬で、ステッセルの名に因んで「壽號」と命名した馬であつた。天壽を完ふするやうにといふ意味でもあつた。

旅順のかたき役であつたステッセルに對する同情の意味も含まれ、主と別れた馬に對する愛情の意味も含まれた「壽號」であつた。

大將は「壽號」の鼻づらを撫でながら、「お前も無事でいゝのう」といひながら、なつかしさうに見入られた。

旅順のその日も、繪のやうに胸に浮んだであらう。

大將夫妻は人蔭など與へて、別れがたなに別れられた。

この「壽號」が、佐伯氏の手で育てられるやうになつたのは、佐伯家が代々勤皇の家であるからでもあり、熱心な牧馬家でもあるところから、「壽號」の終りを完ふさせたいためでもあつたのである。大將が、佐伯氏に「壽號」を贈つたとき、馬の略傳を添へられた。

馬ハアラビヤ産ノ牡馬デアアル。左前脚ニ傷ガアルガ、ソレハス氏ガ戦線巡視中、日本軍ノ砲彈ノ破片ガ岩ニ中リ、ソノ碎片ヲ受ケタモノデアアル。ス氏カラ贈ラレタ時ハ跛行シテキタガ、數ヶ月後ニ癒ツタ。性質ハ極メテ順良、爆彈ノ音ニモ驚カナカツタ。ス氏ハ常ニ戦場デ之ヲ使ツテキタ。三十九年四月、青山練兵場デ行ハレタ凱旋大觀兵式ノ際ハコレニ乘リ天覽ヲ賜ツタ。といふ意味がしたゝめてあつた。

「壽號」は種馬として、六十餘頭の父となつたといふことである。

その内の一頭が、「乃木號」と命名され、大將に飼はれてゐた。

大將が自刃される朝、カステラを盆に山のやうに乗せて既に行かれた。馬は秣を食つてゐて、カステラの方に見向きもしなかつた。

大將はそのまま引返したが、しばらくして又馬のところへ行かれた。

「乃木號」は、大將の手に持つカステラを見ると、前掻きしながら欲しがつた。

大將はカステラを一つ／＼口に入れてやりながら、鼻づらを撫でられた。

これが「乃木號」とも永久の別れであつた。

「壽號」はその後、自刃少し前、乃木邸にゐたと思はれる節もある。山田副官が調教したといふ話もある。

二六 繪卷物の人

隅田川のほとりにある百花園へは、大將がたび／＼足を向けられた。

園内には、大將の記念品がかす／＼ある。

明治二十六年の春、大將は一夕、園の梅樹のもとで、火を焚いて花見をされたことがある。今その

梅は枯れたが、そこに箒かきを吊るし、「乃木將軍箒の梅」として、園内の名物となつてゐる。

日はもう暮れてゐた。馬上の人が園の門を叩いたので、主人が出て見ると、見慣れぬ武官が立つてゐた。

大將は「わしは乃木といふものだが、夜中に参つてすまぬが、泥棒と思つて、見せてくれまいか」といつたので、主人は喜んで迎へ入れ、篝火を焚いて、大將に見て貰つた。

丁度梅の眞盛りであつたので、火が花に映じ、又とない眺めに、大將は非常に喜んで歸られた。

日清戦争が終つたある日、又園を訪づれ、梅見の禮を言はれ「戦地で篝火をたくたびに、あの夕べのことを思ひ出してゐた」といはれた。

主人はそれを聞いて、泣かんばかりに喜んだ。

園内に「乃木蘭」と名づけたものがある。日露戦争凱旋のとき、大將が戦地から持ち歸り、鉢と共に園に寄附したもので、大將の歿後、石黒忠恵子爵が「乃木蘭」と命名したのである。

ちろりには、――

萬物靜觀皆自得

典

とあり、茶碗には、――

酒茶共通

典辭戲

と書いてある。園の樂燒場で燒かせたものである。

その後も、屢々來ては花を賞觀し、そのちろりと茶碗とで、一喫一酌して歸らるゝを常とした。

石黒子爵が、この二點について由來記を書いてゐる。

「明治三十六年三月某日、乃木將軍單騎當園に來り、自ら馬を門外に繋ぎ、園内を散歩して、時花を愛玩し、亭に休み、茶を喫し、更に製陶場に至り（ちろりと茶碗の文句を紹介し）陶成りて後、賞玩や、久しく、黄昏歸途に就きたりと。園主此二點を珍重すること周到善ならざる也。抑々將軍の忠勇高節は世界普く知らるゝも、風流如此かくのこごとは知るもの稀なり」

風流子乃木の面影は、この一文の中に繪のやうに浮び上がつてゐる。このやうに、わびしい人であり、心やさしい人であつた。門外に馬を繋いで花を賞するといふ大將、――何といふみやびやかな繪巻物であらう。

この園によく遊びに來る人に、隅田川の主なみたいたな榎本武揚があつた。

乃木大將は、「この園に酒のないのが美點だ」といつたのを、榎本さんが聞いて、「この園に酒がないのが缺點だ」といつた。

園の方では、榎本さんだけでは土瓶に酒を暖めて出すことにした。

榎本さんは、非常に喜んで「これを乃木に出してみろ」といつたので、園主が大將の來たとき、土

瓶酒を出した。

一三二

大將は「だれの入智慧か」といつて笑ひながら飲んだ。

茶碗に「酒茶共通」と書いたのは、その後のことである。

その園主もどうなつたやら？ 園も震災でメチャクチャになつたらうが、それでも百花園の名はなつかしい思ひ出である。石黒子も、先ころ地上を去つて行つた。

二七 文人乃木

大將の詩は立派だつたし、又よく作りもされた。支那のある學者が大將の詩を見て、「日本にこんな立派な詩作者があるのか」といつて驚いたといふ話がある。「日本にも」は、一寸ひどいが、何しろ本場だからこれも仕方がなからう。

出征中は、詩を志賀重昂氏に見せてゐられた。志賀氏は大將の詩を無遠慮にコキ下ろすので、大將も志賀氏のサク／＼した氣分を又となく愛されてゐた。

歌は井上通泰氏を師としてゐた。井上氏は「そんなになさらなくても」といつてゐたが、師としてでなければ、思ふように直してもらへぬから、といつて居られた。

添削を頼むとき、返信用の状袋に住所名宛を書き、切手まで貼つて出されたものである。

大將は「謠は亡國の聲だ」といはれたとかいふが、それはある年參謀旅行に行つたとき、宿の主人が人の迷惑をかまわず、夜ちゆう盛んにうるるので、「うるさいな」と、口からもれたので、大將は謠はきらひのやうにいはれたものらしい。

すこし謠へると、人の迷惑も考へず、所嫌はず、時構はず、得意氣にやる人間があるものだ。

日誌に「此夜發聲」とあるのは謠をやつたことなのである。大將は明治二十五年ころ、野村靖氏について教はり、那須野では時に大にうなられたものである。

最も得意なのは「小袖曾我」であつたさうだ。かたみの謠本は長谷川元帥の家に納まつてゐるといふことである。

暮もやられた。陣中一戸參謀長と對局したこともある。二三目一戸大將の方が、上だつたといふことだ。

大將の書はかなり多い。屏風の裏表へ書いたものすらある。

一三三

額はあまり書かれなかつた。高いところへ掲げるので、高貴のえが下を通られると失禮にあたるからといふのであつた。

絶対に書かれなかつたわけではない。いづれかの時には書かれたこともあるらしい。

字は書いても印は捺されなかつた。「希典」と書き放しのこともあり、花押を書いたものもある。印がないかといふと、さうではない。書籍などには、かなり大きなハンコが捺してある。

大將の書の偽物はかなり町にハンランしてゐる。一時は銀座の夜店に出たこともある。第三軍司令部と印刷した公用罫紙に書いたもので、封筒にはチャンと野戦郵便局の消印まである。

戦後の整理品中に、罫紙やハンコがあつたではなからうか。それを利用して、悪るさしたものと見える。丁重に表装して、大將の眞筆と思つてゐる人もあるやうだが、公用罫紙に私信を書いたりする

大將でなかつたので、見えすいたニセだが、悪どいいたづらである。大將は繪畫についても深い趣味があつた。自身でも、一筆書きであるが、ガツシリした筆を持つて居られる。

達磨や、蝸牛や、撫子など面白いものを描いて居られる。

明治四十四年、渡歐された時、忙しい中にも巴里の繪畫館は、隨員も閉口するほど、時間をかけて

見られたものである。筆者についても一に説明を求められた。

氣に入つたものがあると、釘づけられたやうに動かれなかつた。

歐洲の繪畫館で殆んど見られないものはないくらいであつた。

日本畫については、立派な批評眼を持つて居られた。殊に雪舟派の淡雅なるを愛せられた。

新畫についても、色彩や運筆について、批評されることも少くなかつた。

寫眞を撮ることも、好きなもの、一つであつた。何かあると記念にといつて撮られた。

松村務本中將(第一師團長)が、遼陽で病死したとき、寫眞を撮らして、遺族に送られたこともあつた。

自刃前日、寫眞を寫されたことも、さういふ好みからでもあつたと思ふ。

大將は大の讀書家であつた。随分いろ／＼なものに目を通された。

山鹿素行に心を傾けてゐられたとだけ、「中朝事實」は、暗記するくらゐだつたし、複製をして配つたりされた。

「中朝事實」だけでなく、「山鹿語類」「武教本論」「武教小學」等々、すべて素行のものであると共に、すつかり乃木のものになり切つてゐた。

日柳燕石の「吞象樓遺稿」は愛讀書の一つであつた。燕石は、讃岐琴平の人で、身の丈は五尺に足らず、膽力があつて博勞の親分であると共に、勤皇家であり、學者であるといふ人で「吞象樓遺稿」はその詩集である。

燕石の名は近年大に世に謳はれ、上演されもしたが、大將は早くから燕石の心に打たれるものがあった。

燕石は山陽の又弟子であり、頗る波瀾に富んだ詩人であつた。

二八 那須野の原

日露戦争前三年は、大將が全く百姓になり切つてゐるといつてよかつた時代であつた。

米も作れば、野菜はいふに及ばず、果物も作られた。

雨の日は繩を綱ひ、箒を造つた。

自分で鎌もとがれた。

作つたものを出品して、農會から賞品を貰はれたこともあつた。

田植の手傳ひに來た村の人に、手拭を一筋づつ禮に贈られたりした。

祭には作男の次郎、龜吉を角力見物にやり、夜は自分で盆踊りを見に行つたりされた。

網の代りに、蚊帳を外に張つて雀捕りをされたこともあつた。一羽も捕れなかつた。

講釋師にいはせると、乃木さんは、若い時は米を搗いて賃仕事をしてゐたなどといふが、昔小祿の者は玄米で渡されるので、めい／＼の家で米を搗かなければならない。米は搗いたが（家の外に米搗き器械が造つてある）賃仕事をしたわけではなかつた。

那須野には水車もあつた。

田圃を通りながら、草を取る百姓に丁寧な頭を下げられた。

巡查が巡回して來ると、必ず茶を出された。

那須野の住人になつた時は、鎌一挺と、金五十錢を配つた。村は三十三軒あつた。

那須野の家を建てる時、大工に仕様書を作つてくれといつたので、大工は二寸の釘でいゝところを三寸四寸といつたやうに、豫算を多くして書き出した。

いよ／＼となつて、大將は材料をその仕様書の通りに與へたので、大工は弱つてしまつた。今更設

計の間違ひともいへないので、その材料を使つたところ、廊下や天井から釘が突き抜けてゐたり、不體裁な家が出来てしまつた。

石林の家は、明治二十四年春から閑居の場所とされたのであつた。

ホントウの百姓家で、納屋、肥料小屋、水車小屋がついてゐる。

耕作地としては畑三町歩、山林を合せると十町歩あまりある。

こゝは靜子夫人の叔父である鹿兒島藩吉田清皎が、明治十三年頃から農生活をしてゐたのを大將が譲受けられたのである。

この家の出来たときは、世話になつた人を招いて夫人の手料理と、大將のお酌で御馳走をされた。招かれた人は豊年踊などをやつて御祝ひした。

坐敷が八疊、次の間も八疊（爐が切つてある）奥が六疊二間、玄關は四疊半、そのうしろに三疊がある。そこから臺所についでゐる。

その臺所がひどく變つてゐる。こゝは臺所でもあるが、應接所であるといつていい。土足で入れるやうに、板が切つてあり、そこに大きな爐がある。煤けた天井から自在鉤がブラ下がり、鐵瓶がかけであり、火消壺も置いてある。隅には竹で組んだ棚を据え、苗蒲團（稻の苗で編んだ圓形の座蒲團）

がころがつてゐる。むろん竈もある。農家そのまゝの廣い臺所である。

村の人たちが、草鞋穿きのまゝ火にあたりながら、話し込んだ姿が今も目に映るやうだ。大將が、モンベイ姿でゐるところは、百姓ソツクリで、こんなによくうつる人もない。

杉林がある。ビール瓶や、罐詰の殻や、屑を賣つて杉苗を買ひ、夫人が植ゑられたもので、今は鬱蒼として繁つてゐる。村の人は「靜子林」といふさうである。

石藏がある。大谷石で疊んである。この地方には珍しくない石の藏である。二階になつて居り、地下もある。芋や人蔘の貯藏のためである。

一側に清水が湧いてゐる。一間四方もあらうか。飲料ともなり、灌漑にも用ゐられてゐる。この清水あるために、大將もこゝに農生活を営まれることになつたといふことだ。身も切れるやうな冷たい水である。

森の百姓——大將が朝起きてこの清水を汲んでうがひをされたところだ。コップに汲み、顔を洗ふだけしか使はれなかつた。

とても大事にされた泉である。この泉がありながら井戸が掘つてある。風呂用、洗濯用で、泉の水は汚さぬやうにといふ心遣ひが見えてゐる。

坐敷などには、竹の節で造つた、特種の衣紋カギがナゲシにかけてある。大將の考案である。

夫人は、髪は大い束髪であり、地味な盲縞みtainな着物を着て居られた。——若いころからとても地味だつた。すべて木綿物で、下駄は日光下駄だつた。

東京でも、冬もあまり羽織は着られなかつた。

赤坂の邸では、下の部屋（地下室にあたる）ところ、茶の間あり）で大將と二人で箸を取られた。兩典戦死後の淋しさは、わきの見る目も氣の毒だつた。

夫人とはとても仲がよかつた。冷やかだつたなどといふのはウソである。

稗飯は乃木家の常食といつてもよかつた。夫人は鹿児島なので、殊更稗飯に慣れてゐた。（鹿児島人は、藩の財政難からして非常に粗食したものだ）

麥や粟も造られた。フキのトウを生で酒のさかかにされたりした。酒は茶碗で冷のまゝだつたが來客には爛をして出された。

大將歿後、村の有志が、大將の往時を偲んで稗飯とトロロで、一月十三日には、集りを今でもしてゐる。

近所の磯兼吉といふものを農事の手傳ひにされた。非常に忠實で大將のお氣入りであつた。

着物を着替へて行くものがあると、そんなことをしないでくれと、しよちゆう言はれた。

仕事中は遠方なら、お互帽子を取るまいといはれた。

百姓の仕事として、一番難儀とされてゐる麥打を、大將は七反歩の麥をひとりで打たれた。

モンペイも、シャツも梅の皮を煮出し、その液で染めてあつた。汗もはじくし、ホコリもつかないさうである。

夫人も、こゝでは全く百姓のおかみさんと同じやうな風をされてゐた。一寸見では全くわからなかつた。麥藁の帽子を冠り、手拭にておさへ、足袋はだしで、苗などを持運びされた。

磯の家内がお産で寝てゐるとき訪ねて行かれたが、磯も足にソコ豆が出来て寝てゐたので、大將は勝手元から、水を酌んで持つて來て、足を冷やせといはれた。

「これでも食つたら」といつて、帆立貝の煮たのを持つて見舞に行かれた。

大將は、ひまさへあればマキ割をされた。磯と相撲を取つたことさへあつた。

那須野は、大將の「隠れ家」みたいなものだつた。大將には休職がつきもので、明治二十五年（四十四歳）を筆頭として、明治三十一年、三十四年とある。そのたび毎に那須野へ引つ込んで、閉門同様の生活をされた。

いつの頃に書かれたものか、爐の切つてある部屋に「賣刀買懐」と自筆（署名はないが、表装してある）の額がかゝつてゐる。「刀を賣つて、小牛を買ふ」——大將の心事察するに餘りある。見方によつては、ヒョウキンでもあるが、又憂鬱をもらされたとも取れやう。

「世の中になすべき事も多かるに、こんなところで、何をなすのか」といふ狂歌も、この閑居時代の作である。

第三軍司令官として、田圃の中から浮び上がったのではあつたが、大將が鋤を持ちながらも、イライラしてゐた氣持が讀まれる。

二九 草に寝て

日露の風雲急なるのとき、大將は那須野に引込んで、悶々の日を送つてゐられた。

そのころの大將は、たゞ農人としての日々であつたが、何となく胸に納まらないものがあつた。

次の「農事日記」（一部大要）には、少しもその感情が盛られてゐないが、そこにいひ知れぬものが

のぞかれる。

明治三十六年

八月二十五日 晴、三時、九十度

遊引き、箕、笠、箒等。東京へらつきよ六升送り、賃届迄二十五錢。郵券二十四錢、盆前勘定一圓十八錢。午後一時より古田へ水掛け、本日午後より乾草刈始め。夜半驟雨あり。

同 三十日 曇

朝鹽原及東京東宮職へ賀表差出し、郵賃書留にて二十錢。朝人參飯、茄子胡麻焼、蕓、玉子焼、春玉浸、焼茄子、晝飯揚物（南瓜、桑葉、玉蜀黍、午夢、干鯛）諸弦玉子とじ。本日室及勝典より來書、籠屋來る、竹買ひ十三錢入り。

同 三十一日 霧、後晴

本鹽原道掃除。龜吉出役、午前豆茶を採る、（石畑於近傍）。次郎蕎麥草取、午後田稗を撒く。蟲取り。本日御誕辰に付國旗を掲ぐ。

客あり門内草深きを咎めければ、

夏艸は古つはもの、晝寐どこ

八月中惣費、金貳拾六圓拾四錢、内雇女五圓四拾五錢、内稅四圓七拾五錢貳厘、内肥料過燐酸膏圓四拾五錢、内男三人給四圓五拾錢。

九月一日 曇、後晴

朝政吉を大山邸に遣り御着時刻を問ふ。九時半より通常禮装にて大山邸に到る。十時半、東宮殿下鹽原より御來着、奉迎、拜謁後赤坂家屋の事等御尋ね奉答、御手づから御煙草マッチを賜る。大山家の晝食の饗あり、

同 四日 曇

石畑草取、朝食後政吉を連、大田原、寒冷紗三尺四寸を買ふ、二十七錢八厘。政吉醬油二升、三十八錢、

同 六日 曇、曉雨あり

夏草に古兵の高軒影高くすむ弓張の月

磯兼吉より餅到來。午後海苔巻造り隣三家に配る。飯一升五合、念佛講五厘出金。

同 八日 曇、後晴

紙屑代一錢六厘、夜に入り、忠次郎蕎麥一重、阿見幸吉葡萄一盆（三十總計り）持參。

同 十五日 曇

朝竹林に群蜂あり、其聲甚だし。

勝典露國陸軍ブーア戰術評論を送り來る。

同 十八日 曇、後晴、夜に入雨

竹一束十六錢、味噌漉笊一つ買ふ三錢。

春の花におくれかちなる山住は

秋の紅葉を早く見てけり

同 十九日 夜來雨、曉風加はる

午後惣代喜一郎來。二十四日納稅の件、チャボ稗の效能を説く左の如し。一、收穫の多きこと。二、幹葉を馬料として佳なること。三、種を要する少なきこと。四、風損の患へ無きこと。五、下草の生ぜざること。六、交植の小豆日光を受くる多きこと。七、刈入運搬に輕便のこと。八、下種早く化す都合よきこと。九、麥刈の時邪魔にならぬこと。十、食して好味なること。以上を數へ來れば十德稗と云ふべし。

同 二十五日 曇

午後三時より雷雨、雹降る、ミナに饅頭を打たしむ。本日醬油なし。晝南風鹽煮饅頭、味噌だし共に甚佳なり。

同 二十八日 快晴

午前一時半馬二頭共逸出し、漸くにして次郎平山にて取押へ歸る、二時半なり。本日風祭り、小供角力致度出金を請求す、壹圓寄附。

本日小山下行者堂にて角力興行、四時より次郎龜吉休み見物に遣はす。夜酒を興ふ。饅を煮る。夜三叉路に盆踊りあり、行て一見す。

同 二十一日 好晴

朝、次郎停車場行、過隣酸二俵、金二圓七十六錢。

那須野なる我すむ宿の板びさしむかしながらの霞をぞきく

那須野なる板ふき家根の一つ屋に霞聞とて我ひとりすみぬ

十二月十一日 晴

午後竹伐り、保典より來書。夜風呂吹。

大根喰ふて大黒さんに首尾わろし見すて、たもな大虚空藏

同 十四日 晴、有風夜強

端書代十九錢五リ、室持參の品。

一、數の子一升二十五錢。一、田作一升十一錢五リ。一、昆布キザミ二錢。一、出シ昆布五錢。

一蜜柑三十、拾錢。一、サンマ二十錢。一、曆壹冊。外に馬場よりウルメ干物十五枚、柴よりス

ルメ二把、昆布一把。

同 二十一日

次郎道路普請村役に出、龜吉と臺所煤掃、障子繕ひ、午後餅米洗、夜取粉ひき。

本夜より夜廻を始め、宿に當る。小夜食鍋焼餅を興ふ。

同 二十六日 曇、日出零下五度

本日現金十圓五十錢、午後急行、室東京へ歸る。小麦粉一斗、精稗一斗、蕎麥一斗、餅持參、本日竹伐り、山廻りをなす。

同 二十七日 晴微雨、日出零度曇

朝トロ、汁、中城下木伐り、五三郎來。炭一俵到來、政吉澤庵漬をなす。數約二百本、鹽九升糠一斗、砂五升、籠屋市村七十錢渡し、午後歸る、負籠一ツ外東京行策三ツ。剪髪す。

三〇 上陸第一日

北泡上崖の村の夜は更けて行つた。

大將は第三軍司令官として、けふこゝに着いたのである。

二月五日動員令があり、那須野から動き出して、近衛師團長（留守）となり、五月、軍司令官を命ぜられた。六月六日大將となつたのである。鹽大澳に第一歩の足を踏み入れられた日であつた。

南山を陥れた奥第二軍は、乃木軍の來るを待つて、北の戦場へ行くことゝなつた。

大將はアンベラの上に坐つて、津野田參謀から南山の戦況を聽かれた。

機關砲でひどくやられたことなどを聽いて、それが無いことを残念に思はれた。

そのころ、タ、タ、タ、タ、といふ音を聞いたものがなかつたのである。「太鼓を打つとるのだらう」などといったものさへあつた。

日清戦争でさへ、支那軍は機關砲を持つてゐたのである。

金州で戦死した勝典中尉のことと思ひ出されるのであつた。

勝典の戦死は、出征の途上廣島で聞かれた。今、目の前に金州の城が黒い姿をさらしてゐる。そこが勝典戦死の所なのである。

家の外には、ワック／＼と人の通る足音がつゞいた。馬の嘶く聲も淋しかった。廣い庭の中には、人影が提灯に照らされて、影繪のやうに動いてゐる。

參謀も去つてしまひ、大將ひとりなつた。黙つて木像のやうに坐つてゐられた。

「闇……！」

聲をかけるものがあつた。それは馬丁の鎌次郎である。

「ウム、何か」

「闇下、あかりもつけられないで」

「シュー」

「馬は皆無事に着きました」

「さうか、ご苦勞、元氣かの」

「元氣でございます」

「さうか、あすの朝、乗つてみよう」

「それがよろしうござります」

「こんどはどちらの方へ行くのでござりますか」

「南だな」

「南と申しますと、旅順の方でござりますか」

「ア、そんなところだ」

「旅順ぢや、馬も働き甲斐がないでございませう」

「どうしてだ？」

「狭いところですから、馬も働き甲斐がないでせう。折角お伴して来たのでござりますから、馬にも存分働かしてやりたいと思ひまして。——でも、昔のやうなら何でもありませんが」

「こんどはそういふわけに行かんぞ」

「さやうでございませうか」

「でも、早く廣い北の方へ行くことにしよう。北は廣いからかう」

「馬もさぞ喜びませう。朝下、飼付をして來ます」

「ウム、早くしてやれ」

鎌次郎は土間を出て行つた。

人の足音がゾロ／＼とつゞいた。馬丁谷田鎌次郎は、三十年も前から大將に仕へた。その谷田もとつくに土の下に隠れたが、日清戦争以前からの馬丁であつた。

日清戦争にも旅順へ来たので、「こんな狭いところ」と思つたと見える。「又一日で」と思つたかも知れない。あのときは一日で落したのだつたから。

日清戦争中は、兵隊と同じやうに傳令などもやり手柄があつた。田莊臺で大將の副官が負傷したので、鎌次郎は、副馬（大將には三頭の馬があつた）に乗つて、第一線にまで出た。

そのころ馬丁といふと軍夫同様だつたから、行賞の道がなかつたので、大將は、年に功七級に當る白圓を與へて、従軍中の賞與とされた。

「馬は寒い暑いをいはんからかう」

物言はぬ友への大將の大きな愛であつた。既も煉瓦造りで、馬にしては、御殿に住まつてゐるやうなものだつた。

馬の扱ひ方はやかましかつた。谷田以外のものではやり切れまい、といはれたものである。

谷田には、旅行先からでもよく手紙をやられた。全文片假名であつた。(漢字があると假名を振つて)馬のことを何くれといつてやられた。

谷田が、一生の間に、大將に叱られたことは數へるほどしかなかつた。

大將は結果を見て責める人でなかつた。骨惜しみをしなければ、出來のよしあしは問題にされなかつた。

計畫しながら實行しないやうなものにはビシ／＼とやかましく言はれた。

三一 父子兄弟共に旅順

勝典中尉は二十六歳で戦死した。(私と士官學校の同期生である)

勝典は歩兵第一聯隊第九中隊の小隊長であつた。

出征の前の晩、蕎麥を取つて父子睦じく會食し、出征の日は、大將が新橋驛へ行つて、葡萄酒を酌んで別れた。

保典は歩兵第十五聯隊第十一中隊の小隊長であつた。

勝典と同じ日の夜、新宿驛を通過すると聞いて、好物の鰯を持つて行かれ、勝典と酌み交した葡萄酒を開いて別れを告げられた。

同じく第一師團の小隊長、同じ日の出征、二人とも父の部下として同じ旅順で戦死した。

大將が葡萄酒や鰯をさけて、新橋に行き、新宿にと持廻られた姿が、目の前に映るやうだ。その暖かい父のもとで、二人とも見事な戦死を遂げたのである。

南山に向つた勝典が、親戚に宛てた手紙の中に、――

砲彈モ小銃彈モ敵ヨリ御見舞ヲ受ケ候。殊ニ私ノ身邊ニ三發ノ榴彈ヲ受ケ、頭ヨリ砂ヲ冠リタルトキハ、少々コワク有之候。其後、毎日砲彈ヲ受ケ居ル爲メニ、此頃ハナレ申候。敵ノ形モ毎日見居候。

保典ハ、私ノ隣リノ山ヲ守備致シ居候、兄弟相去ル數百歩ニ候。

云々とある。「少々コワク有之候」――何といふ淡白さであらう。

「保典は隣りの山にある」――この一語、睫の熱くなる思ひである。

この手紙は「五月二十二日午後九時、金州北方八里庄にて」とある。僅かあと四日にして戦死した

のであり、その八里庄で遺骸を火中されたのであった。

二十六日午前五時頃であつた。金州の東門と一軒屋との中間の畑地で、右腹を撃たれたのである。腹を撃たれたものは千人が千人先づ助からない。その苦しみは、とてもわきの目では見られない。中尉はその苦しさを忍んで、散兵線を指揮してゐるのであつた。

「佐々木、々々々！」

佐々木（傳太郎）は、中尉の従卒である。

「どうされたましたか」

「やられた、残念だ」

「どこでありますか」

「こゝだ」

右脇腹を見ると、血が滲み出てゐる。刀帯をゆるめると血が一どにドッと吹き出た。

「さがりませう」

「イヤ、下らん。こゝで死ぬるのだ」

「報告して來ます」

佐々木が走つて中隊長のところへ行つて、「乃木少尉負傷」と叫んだ。

「さうか、そりや残念ぢや、早くさがれといへ」

「ハイ」

佐々木に負はれた乃木少尉のからだは、金州街道のほこりの上に血を落しながら、開家樓の野戦病院（第一師團第二野戦病院）へ下がつて行つた。

少尉はどうしても退かうといはないのを、中隊長の命令だといふので止むなく、従卒に負はれて戦線を去つたのである。

「杉山軍曹！」

「ハイ」

「小隊長代理だ。たのんだぞ」

「ハイ、少尉殿、おからだを大事にして下さい」

軍曹は泣く／＼少尉を見送つた。

「もうとても見込はない」といふので、佐々木が、遺言を聞いたが、「武士の子だ。何もよす」といつた。

「それでもお母様何にか」

「何もなし」

「それでも」

「お前が凱旋したら、残念ながら戦死した、といへばいい」

「ハイ」

苦しみはどこまでもくっついた。

二十時間、二十五時間、三十時間、とうとう三十五時間にも及んだ。

「兄上！ 保典です」

「ウーン」

手をさしのべたが、もう眼も見えなかつたやうだ。

不意に大きな聲を上げて、「ヨイショ」「ヨイショ」といつた。

ヨイショくがしばらくくつづく内に、それも次第に細り、とうとう息を引いてしまった。

「乃木の息子として恥しい死方をするなよ」といふ父の教へ、一生瘦我慢を以て通つた大將の姿、それが勝典中尉の最期であつた。

當時、歩兵第一聯隊の旗手であつた。私と同期の岸孝一氏が傷いて、同じ病院に在つたので、乃木中尉の最期の様子が傳へられた。

乃木中尉がもう駄目だといふとき、看護人が「今乃木さんの御臨終ですから、見て上げて下さい」といつて来たので、立會ひ、その最期を見届けた。

大將が金州に着いたのは六月七日であつた。

その日は暑かつた。午後三時ごろだつた。大將は南山の戦跡を見て来るからといつた。

傳騎三名と副官を連れて、山に登つた。占領後ヤッと十日経つたばかりだから、まだところどころに腐つた露兵や馬の死體がころがつてゐた。

露軍が残した探照燈などに興を覺えられたらしく、兵士が銃の臺尻でプチ破つたガラスの破片を見て、（怨み重なる探照燈）と思つた兵士たちの顔を想像してか、微笑さへもらされた。

工事など一々見巡つて、「ウム、ウム」と、如何にもその大仕掛なのに驚かれた風だつた。

「昔は工兵のことを鉄兵といつての。鉄兵が臺場（散兵壕）を造つても、之れに嚙りついておちやいかん。こんな炬燵みたいなものを造つたんぢや、急に外に出られないからの」
など、いつて、工事の大袈裟なのを見て皮肉られた。

炬燵の南山、——いよく旅順の大炬燵攻めをやることとなつたのである。地圖を開いて、攻防の關係などを考へておられる間にも、金州城の方へは何度か顔を向けられ、無言の何分かゞつゞいた。

「山川草木」の詩もそのときに生れた。感慨に堪へられなかつたであらう。——我子の死んだ所と思ふと。

午後五時頃下山された。「金州城外立斜陽」の一語、萬斛の涙を含む七字であつた。

三二一 柳樹房の夜

旅順戦の第三軍司令部は、柳樹房といふ小さい村に置かれてあつた。

旅順戦は思ふように抄取らず、一と月二た月で、手もなく落せると思つた旅順が、夏がすぎ、秋がすぎ、雪が降り出してもビクともしなかつた。

柳樹房で戦況を案じつゝ黙然として坐つてゐる大將の部屋には、豆のやうな火が、小さい瀬戸火鉢

の中にまたゝきしてゐる。

夜が更けても、大將は寝もやらず、戦況如何にと胸をいためてゐられた。

大將はアンペラの上に、灯もとさず、黙つて坐つてゐられる。

外套を頭から冠つたまゝ目をつむつてゐられる。

小さい煤けた机が据えてある。その上に一本の蠟燭が立てゝある。マッチが一つ、そばに置いてある。

机の上には地圖が折り重ねてある。その上に鉛筆が一本。

大將の咳拂ひがときゝ部屋の外に漏れた。

窓の外は眞つ暗だ。ところゝにムクゝ動くものゝあるのは、軍の傳令兵でもあらう。

馬がヒヒンと淋しそうに嘶いてゐる。

二百三高地方面では、きのふ以來一ときも砲聲が絶えない。ドロン、ドロンといふ地を揺するやうな音がつゞいてゐる。

明治三十七年十二月一日の朝である。

朝といつても、午前三時といふ時間である。木も石も眠つてゐる。

たゞ、ヂッとアンペラの上に坐つたままであられるのは大将である。

リリン、リリンと電話の音が耳に入った。「オー、オー、さうか、さうか」といつた聲が聞へた。それから三十分も経つた頃、大将の部屋の暖簾をぬくつて入つて行つたものがあつた。

「だれかい」

大将の聲が暗い中から聞えた。

「お休みでなかつたのでございますか」

「ウム、——白井か、何か用かの」

白井は中佐で軍の参謀である。

「戦況を申上げにまわりました」

「さうか、一寸待つてくれ」

ゴソ／＼としたと思つと、マッチをすつた。蒼白い火が大将の顔を照した。

大将は蠟燭へ火を移された。シンがジー／＼と音を立てた。

大将は羽織つてゐた外套を脱がれた。そして、膝をキチンとそろへて、白井参謀の方を向かれた。

大将は、報告を聴くときに、胡坐をかいたりなんかしたことはない。いつでも、チャンと姿勢を正

された。

「戦況はどうだ」

「二百三高地方面でございますが」

「ウム、どうだつたかな」

「先程第一師團から電話がございまして、昨夕以來突撃を重ねましたが、遺憾ながら又失敗に終つたと言つてまわりました」

「さうか、いかんか。して、死傷者はどのくらゐあつたかの」

「ハ、まだ、ハッキリわかりませぬが、今に報告があらうと存じます。暫くお待ちを願ひます」

蠟燭の火に照らされた大将の蒼い顔を見ると、それ以上のことが口から漏しかねた。

大将はジッと灯を見つめたまゝ何もいはないでゐられた。

中佐は、大将の顔を見成りながら、涙がこみ上げて來た。手足がブル／＼と震へた。

「申わけないことだ。よく調べて下さい」

大将は、思ひ出したやうに言はれた。首はうな垂れてゐた。

「ハイ」

中佐が、まだモヂ／＼してゐるので、――

「もうそれだけかの」

といはれた。

「ハ、それに、閣下！」

「なにか」

「閣下の御令息が」

「どうしたのか。戦死したといふのか」

「ハイ、戦死されました」

中佐の口から我ともなしに吐き出された言葉であつた。――大将から引出されたように。

「戦死したか、保典が、さうか」

かういふなり、大将はブイと蠟燭の火を吹き消してしまつた。そして、からだかアンペラの上に倒れたやうな音がした。

中佐はジツと暗い中を見つめた。しかし、もう何の音もしなかつた。

中佐は足を忍ばせて外へ出た。

ゴ／＼といふ風の音が、窓の外を通り過ぎた。

十一月一日、朝、土城子に兒玉（源太郎、満洲軍總參謀長）を待つ。來らず。午食後兒玉と會す。

兒玉大将高崎山へ行く。同夕刻下山す。

白井中佐、保典戦死のことを告げ来る。

二日朝高崎山に至り、同夕刻歸る。

東京より林檎二箱送り来る。一つは保典の分なり。兒玉 林檎を送る。

大将の日誌である。「保典戦死のことを告げ来る」とだけで、何の書き足しもない。思ふて腸を裂思ひである。林檎一つは保典の分とある。このとき保典も亡し、僅かに一日であつた。この二日の日誌こそ、一字一句血がにじんでゐる。

三三三 この父、この子

保典少尉は、友安旅團長（後備歩兵第一旅團）の副官であつた。十二月三十日の午後八時ごろ、旅團長は残れる二中隊を提げて、二百三高地に向つて突撃するに決し、その命令を乃木副官に傳達させた。少尉承つて塹壕内を前進中、額に敵弾を受けて即死したのである。

旅團長は、少尉が歸らないので、いろ／＼と搜索したところ、傳令の報告によつて、戦死したことを知つたので、軍へ電話したのであつた。

保典少尉戦死の場所は、二百三高地の中腹である。今もそこに記念碑が建てゝある。

軍の高級副官吉岡中佐（吉岡友愛、後奉天戦三軒屋にて戦死）が乃木少尉戦死の報を聞いたのは、白井中佐よりも少し後れてゝあつた。

吉岡中佐は、津野田参謀（後の少將津野田是重）に、「どうしたらいいだらう。大將に話したものだらうか」と當惑顔に言ふと、津野田参謀が引受けることになり、大將の部屋に入ると、大將は又蠟燭に火をつけた。

津野田参謀が、恐る／＼乃木少尉戦死のことを報告すると、このときは「そのことなら知つとる。能く死んでくれた。これで申譯が立つ」と、いふなり、又灯を消してしまはれた。

津野田参謀は、灯を消されたので、仕方なしに外に出ると、そこに吉岡中佐が待つてゐた。

二人は抱き合つて泣いた。

保典少尉は、師團の傳令將校として、比較的安んずる位置に置いたらといふ意見もあつた。勝典中尉戦死のこともあり、いくらか保典少尉に目をかけてゐたのであらう。

ところが、これを聞いた少尉は、父大將へ手紙を書いた。

（前略）私、師團司令部へ参るとの話し、歸營致し考へ候所、現今名譽多き野戦隊や隊長より殆んど非戦員に等しき職に轉ずる事に候間、直接敵に接して、兄上様の仇を報いん事をも爲し得ず、且つは何の特別の技能を有せざる私が、選拔を受くるの理由無きに、比較的安んずる位置に赴くの、他同期生に對し心苦しく、他にその適任者（例へば外國語をよくする者）多きに對し、甚だ面白からず考へられ候故、或は此御話の儀御變更相成らざるや。一寸御伺申上候。尤も御命令なれば致方も無之候得共、セメテ旅順陥落まで如何にか相成らざるものにや、御伺申上候、先は要事迄、早々可祝

二十二日

保典

父上坐下

この時、大將は北泡子崖（大連の北方）に居られた。

保典少尉が兄の讐を討ちたいといふ念願に、大將は非常に喜ばれた。そして師團司令部へは取らぬやうにしてくれと言つてやられた。

そこで友安旅團長の副官となつたのだが、向ふところが名にし負ふ二百三高地であり、行くものも行くものも斃れる魔の二百三高地に、どうして生きて居られよう。

乃木少尉も遂に二百三高地の露と散つたのである。

兄の讐を討ちたいから、第一線へ出して貰ひたい、特別の技能のないものを師團へ取るといふのは友人に對しても、軍司令官が父上だけに心苦しい、といふ保典少尉の態度は實に立派なものである。父に對する親しみ、なつかしみの情を思うてそゞろに涙を催さしめる。

大將が兩兒を失はれての後の心淋しさはどんなであつたらう。保典が死んでも、たゞ「さうか」と多くはいはれなかつたが、心臓は張り裂ける思ひであつたらう。

「この父にして、この子あり」といふことは、乃木父子の如きをいふのであらう。

三四 夢の如く悲し

奉天戦の最終日に參謀山岡中佐傷ついたが、その三日前、旅順戦に大將の高級副官であつた、吉岡（友愛）大佐を干洪屯北方三軒屋に失つた。敵の重圍中、軍旗の安否を氣づかひながら、壯烈なる戦死を遂げた。

三月八日の曉方であつた。大佐そのとき四十三歳であつた。實に立派な人で、福岡に銅像となつて残つて居る。

吉岡中佐は、昔日活で作つた「吉岡大佐」の主人公である。歩兵第三十三聯隊長として、天晴な戦死を遂げた。

若い時は、一人の母親に十分の食事を興へることすら出来ぬほど貧しかつたが、その中で苦學力行して士官學校へ入つた。

私が士官學校へ入つたころ、學校の中隊長であつた。

夫人は有名な支那公使山座圓次郎氏の妹で、映畫ではある夏の夜、吉岡大尉が、夫人と屋根の上で涼みがてらビールを飲んでゐると、山座氏が支那へ出發のため、暇乞ひに来る。「吉岡君」「オーイ」「どこだい」「こゝだよ、二階だよ」「二階？　こゝに二階はないぢやないか」「上を見ろ」「――聲の方を見上げると、屋根にわたので、山座氏も屋根へ上がつて酒を酌み交はし、吉岡大尉が互を踏破りながら劍舞をやつたりする場面がある。

吉岡大佐は、橋中佐と双幅ともいふべき、日露戦争が生んだ大勇士であつた。

乃木大將そのまゝを映したやうな人であつた。

保典少尉戦死の直前に、大將が保典の夢を見たといふ話が傳はつてゐる。大將も「保典が、副官肩章を懸けずに来たから、叱つて返した夢を見た」と、白井中佐に話されたさうである。

「いよ／＼總攻撃といふに、面會に来るとは何事ぞ。今は何の時と心得る。暫くたりとも陣地を離れることは相成らぬ。何といふ不心得だ。早く立歸れ。又副官ともあるものが、肩章を外して」と叱りつけた途端に、白井中佐が入つて来たのである。

ウト／＼してゐるときに夢を見られたと見える。如何にも、人の親としての愛に満ちた又武人らしい夢である。

大將が保典少尉の死の前の姿を見たといふには、芝居などにも仕組まれてゐる。

大將は、若い日のこと、萩の城下で月の夜に幽霊を見たといふ話をされたことがある。

蛇の目傘を半分開いた若い女が現はれたところ、ポツと霧のやうに消えた。可怪なことだと思ひ思ひ歩いてゐると、又前のやうに傘をさした女が現はれた。月夜に傘をさしてゐるのも變であつた。幽霊といふものがあるなら、あんなのをいふのだらう、と、話されたことがある。

保典少尉の夢、――それは保典の幽霊でないにしても、そのときは、もう保典は地上にゐなかつたのである。

保典少尉は二十四歳の若さであつた。

三五 多情無情

静子夫人は、恤兵部の手傳ひをして、釦の穴かゞりや、シャツのミシンかけをされてゐた。勝典中尉の遺品が赤坂の邸へ届いたとき、夫人はそれを抱へて泣いて泣いて泣き抜かれた。

世間には、涙一つこぼされなかつた、と傳つてゐるが、さうでなかつた。邸に仕へてゐた女中たちの語るところがほんとうであらうし、又母として泣くのが當然である。

ふだん嚴格に育てたことが、却つて不憫にも思はれた。戦地から歸つて來たら、優しい言葉の一つもかけてやらうと思つてゐたのに、それも叶はなくなつた。

來客があると身繕ひをして出られ、「よく御奉公をしてくれました」といつても、部屋へ引つ込んで泣けるだけ泣かれた。

その上に又保典少尉戦死、夫人の思ひは如何であつたらう。夜戸をたたくものがあつた。起きてみると、保典が立つてゐた。夢であつたが、その時は戦死してゐたのである。ありさうな事である。伊勢神宮へまわられたとき、耳元でハッキリと母を呼ぶ聲を聞かれたといふことである。

父大將の夢に乗り、母の夢に映つたといふのも不思議のやうである。

保典だけでなく、夫人は、勝典戦死の日の夜更に、二階の書齋でしきりに讀書の聲が聞えるので、書齋へ入つて行かれ、「今頃だれですか」といはれたか、何の音沙汰もない。森閑としてゐる。夢であつたかと床につかれたが、又も同じ聲がするので行つてみればシーンとしてゐる。床につけば又讀書する聲、三度も四度もそれがつゞいた。

このとき勝典は戦死してゐたのである。

戦場から歸つて來た夢を見たといふ話はいくらもある。橋中佐もさうであつた。八月三十一日の夜明けであつた。床に飾つてあつた中佐の寫眞がコトツと音をして倒れた。夫人が目をさますと、玄關に中佐が血みどろになつて立つてゐた。

ハッと思つたとき、中佐の姿は戸の外に消えてしまつた。

夫人の語るところであるが、靜子夫人にもキツトあつたことであらう。それが夢であらうと、迷ひであらうと、——夫人の心中は煮え返る思ひに違ひない。

靜子夫人は、保典戦死の報のあつた日は、一日床について居られた。勝典について保典、夫人の胸の内は何と形容もし難いものがあつたであらう。

保典少尉から、腕時計の註文があつた。夫人は蜜柑箱の倍くらゐの箱に、腕時計と、ピストンを澤山入れて送られた。

「一つかみくらゐは、人にも分けられるだらう」などといはれながら、荷作りをされた。

その心盡しの荷物がつかぬ間に、少尉は戦死してしまつた。

兩典が出征する時、夫人は行李の中へ香水を一瓶づつ入れて「戦死したら、これで清めてもらへ」

といはれた。

廣島から電報が着いた。それは乃木さんであつた。開いてみると「勝典戦死、満足の至り」としてあつた。(金州で戦死したことを知らされたのである)

とうどその日、さる人から生鴨を二羽送つて来た。夫人はどこかへ放してやつてくれ、といはれたが、書生が密かに絞め殺して食つてしまつた。

保典少尉の骨は、箱に納めて、大將のもとへ持つて来た。大將はジッと見つめておられたが、「死んだ場所に埋めて置いてくれ」といはれた。

大將は日露役後、戦死者の遺族を訪ねて北陸地へ旅されたことがある。人力車で飛騨の高山から、中山七里へ出られるまで「北陸毎日」の記者S氏か随いて行つた。峠で別れるとき、大將に「記念に何か書いて下さいますまいか」といつて、何も無いから自分の手帳を出すと、——かういふときは大い書かれないのだが、このときは「ヨシ、書かう」といつて、S氏の鉛筆を取つて、——

一滴千金男子涙、多情或有似無情、

と書かれた。S氏は、その字を見つめながら涙をポト／＼と落した。

「多情或は無情に似たるあり」

心中焼くが如き熱涙も、表てには如何さま氷の如く装ふてゐるのだ、といつた一行、——大將の胸中を思ふては涙なきを得ない。

明治四十一年新緑の候、大將は旅順の表忠塔の除幕式に東郷大將と一しよに行かれた。

出發前、三越へ鞆を注文したところが、それに *N. No. 5* と、ネームが入れてあつた。三越で氣を利かしたつもりであつた。

希典 (*マレストケ*) のためだから、*M. No. 5* と入れるべきであつた。それが「キテン」のKとなつてゐたのである。

大將は、一寸「これは違つとるな」といつたが、すぐに「ウム、これでよし／＼、これでい／＼」といつて、それを旅順へ持つて行かれた。

N. No. 5 なら、勝典より外にない。「勝典、——さうだ、これでい／＼」と思はれたであらう。そして勝典の鞆だと思へばい／＼と、思ひ出の旅順へ共に旅することを嬉しく思はれたであらう。

大將は年中軍服で通した人で、那須野で畑をするときだけ、筒袖、モンペいでゐられるくらゐのものだが、一度ある人が着物姿を見たことがある。

その着物たるや、甚だヘンなもので、大きな薩摩緋の上下で、縦縞の小倉袴をはいてゐられた。し

かも行たけの合はない、ツルツルテンで、甚だ以て異様の風體であつた。

その着物こそ、兩典のものであることが、あとでわかつた。

大將はこんなによさしかつた。見たところ、時に無表情のやうに見えてゐても、胸の中には火のやうに熱かつた。死んだ兩典の着物を身に纏つてみる大將こそ、全く「愛」の化身であつた。

富永氏（大將祕書）の夫人は、以前主君の關係から、乃木家に出入りすることが多く、靜子夫人の洗ひ張りや、洗濯を手傳つたこともあり、家庭の内事についてよく判つてゐる人である。

大將の家庭は冷やかであつたなどといふ人もあるが、決してさうでなく、二人の間はいつも暖かであつたと、夫人の話である。

どこまでも一汁一菜主義で、那須野で作つた米、稗、野菜類で賄はれた。

殆んど車には乗られなかつた。雨でも雪でも歩かれた。

馬丁のおないときは、自身で馬の手入をされた。

自刃當夜は、大將の弟大館周作氏たちを、海軍省構内に、御靈輦を奉送のため外出させ、女中たちも出された。

午後八時ごろ、夫人は階下に下りて、葡萄酒を持つて階上に登つて行かれた。しばらくして異様の

物音がした。

居残りの馬場貞子（夫人の姉君）が行つて戸を開かうとしたら、内からカギがかけてあつた。戸の隙間からのぞくと、血が一つばいに部屋の中へ溢れてゐるのを見た。

三六 「乃木苦」の花

見渡す限り、負傷兵が一ぱい轉がつてゐる。

廣い野の上に何千といふ負傷兵が、山から運ばれて来て、横たへられてゐる。

もう手のつけやうもなかつた。灼熱した太陽が、焼火箸のやうな光線を投げてゐる。

うめく聲が、陰々と野の上を蔽ふた。

のたうち廻つて苦しむものもある。血を吐くものもある。痙攣的に手や足を動かすものもある。手の折れたの、足の碎けたの。あるものは狂ひ、あるものは靜かに、――

息を引くものもある。

手のきかぬものは、顔の蠅を拂ふことも出来ぬ。足のきかぬものは、立つて、水を求むることも出来ぬ。

それけ明治三十七年八月末のある日の晝下りであつた。

第一回總攻撃（明治三十七年八月十九日——二十四日）に失敗して、第一線に生き残つてゐるものは、もう戦ふ力もなかつた。——力はあつても、人がなかつた。

三千の聯隊、一夜にして五十人になつたのもあつた。

そして何千とも知れぬ負傷者が、あの谷、この野に眞つ黒に横はつた。

乃木大將のもとに集まる第一線からの報告は、いづれも大將の胸を痛めるものゝみであつた。

「師團が數回の突撃も效を奏せず。今はたゞ殘兵を集めて、只一回の突撃を行はんのみ」

といつた報告がつゞいた。

師團は「たゞ一回」の突撃を行ふ餘力あるのみ。成功素より望み難し、といふのであつた。

かゝる報告を耳にする大將、——「死ぬ」と命令する大將。大將の胸中は熱鐵を呑むの思ひであつたらう。

野には野菊の花は咲けども、それは「野の菊」ではなく「乃木苦」であつた。乃木大將が苦しむの

だ、と思つた。

吾木香の花が咲いてゐる。それを「我亦紅」と呼んだ。「われもまた紅なり」と、戰場にふさはしい名をつけた。

血のやうに赤い撫子の花が山一面を覆ふてゐる。

全滅、全滅であつた。——二百三高地の石を削ると血が出るとさへいはれた。

第一師團全滅、第九師團全滅、第十一師團全滅、——と血涙を含む旅順戰の代表語であつた。

バルチック艦隊は来る。北方の戰場では乃木軍の北進を待つてゐる、——といふ時、前面の状況はいふと、全滅又全滅であつた。死の部隊を以て砲臺にブツつけて行く時に當つて、大將は八つ裂にされるよりも苦しい思ひであつたらう。

大將は靜かに歩いて野の上に立たれた。見渡す限りの負傷者だ。

大將の眼は涙に光つた。後ろに倒れんばかりになつたのを副官がヤツと支へた。

「氷を持つて来てくれ」

といはれた。副官と傳令が後ろへ走つて行つた。

大將は負傷者のそばへ行つて「よくやつてくれた。早くよくなつて又来てくれい」と、一々手をよ